

# 江の河原遺跡

2015

公益財団法人山口県ひとつくり財団

山口県埋蔵文化財センター

え が わら い せき  
江 の 河 原 遺 跡

2015

公益財団法人山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

## 序

本書は、美祿市東厚保町川東地内での農地整備事業の実施に先立ち、山口県美祿農林事務所及び山口県教育委員会から委託を受けて、同地内に所在する江の河原遺跡において、公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センターが実施した発掘調査の記録をまとめたものです。

歴史的財産である遺跡の保護については、基本的には現状保存が望ましいところですが、開発事業等に伴い、やむを得ず消失することになる部分については、事前に発掘調査を実施し、関係機関と調整を図りながら記録保存することとしております。

このたびの発掘調査は、平成25年度から平成26年度にかけて実施しましたが、この調査で、現在の江の河原の集落は、13世紀後半（鎌倉時代）に開拓された農村が元になってかたちづくられ、集落の立地する場所や耕作地は今も昔もほぼ同じ場所であることが地形や遺構、そして生活用具である土器などの出土状況からも確認されました。また、鎌倉時代から江戸時代にかけての土師器、瓦質土器、輸入磁器（青磁・白磁）、国産陶磁器など幅広い時代の遺物を発見し、当時の人々の生活文化や社会の状況等を知る上で、数多くの貴重な手がかりを得ることができました。

この発掘調査をまとめた本書が、文化財愛護への理解を深めるとともに、教育及び文化の振興並びに学術研究の資料として広く活用されることはもとより、本書を通し、ふるさとの歴史や文化を改めて知っていただくことで、郷土に愛着をもつ契機となり、活力とうるおいに満ちた郷土の創造と発展に寄与することを心から祈念する次第です。

最後になりましたが、発掘調査の実施及び報告書の作成に当たり、御指導及び御協力をいただきました関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成27年3月

公益財団法人 山口県ひとづくり財団  
理事長 松 永 貞 昭

## 例言

- 1 本書は、平成25年度および26年度に実施した江の河原遺跡（山口県美祿市川東地内）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は公益財団法人山口県ひとつくり財団が山口県美祿農林事務所の委託〔平成25年度江の河原遺跡調査契約名：農地整備事業（経営体育成型）川東西地区埋蔵文化財発掘調査業務1号（変更1回）および平成26年度江の河原遺跡調査契約名：農地整備事業（経営体育成型）川東西地区埋蔵文化財発掘調査業務2号、農業競争力強化基盤整備事業川東西地区平成26年度埋蔵文化財発掘調査業務3号〕ならびに山口県教育委員会の委託〔平成25年度江の河原遺跡調査契約名：平成25年度農地整備事業（経営体育成型）川東西地区に伴う江の河原遺跡発掘調査業務および平成26年度江の河原遺跡調査契約名：平成26年度農地整備事業（経営体育成型）川東西地区に伴う江の河原遺跡発掘調査業務〕を受けて実施した。

- 3 調査組織は、次のとおりである。

調査主体	公益財団法人山口県ひとつくり財団山口県埋蔵文化財センター		
調査担当	主 査	石井龍彦	（平成25年度）
		上田克也	（平成26年度）
		中里伸明	（平成25・26年度）
	調査員	荒蒔周平	（平成25・26年度）

- 4 本書の第2図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「伊佐」〔於福〕を複製使用した。第1図、第3図、第48図は、山口県美祿農林事務所提供の地図を複製使用（一部修正）した。
- 5 本書で使用した方位は、国土座標（世界測地系）の北を示し、標高は海拔高度（m）である。
- 6 本書で使用した土色の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell方式による。
- 7 図版中の遺構・遺物番号は、実測図の遺構・遺物番号と対応する。
- 8 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

S B：掘立柱建物      S K：土坑      S P：柱穴      S D：溝

- 9 本文中で用いる遺物の分類は、以下の文献による。

瓦質土器：岩崎仁志1999「足跡再考」『陶垣』第12号 財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター 岩崎仁志2003「中華鍋と西日本の把手付鍋－筒状の把手を有する鍋の動向－」『山口大学考古学論集 近藤喬一先生退官記念論文集』近藤喬一先生退官記念事業会 岩崎仁志2007「山陽西部における中世の土製煮炊具」『中近世土器の基礎研究』21 日本中世土器研究会

陶磁器：太宰府市教育委員会2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編』小野正敏1982「15、16世紀の染付筒、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会 九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年』

- 10 報告書作成の過程で、陶磁器については、丸尾弘介氏（山口市教育委員会）、徳留大輔氏・市来真澄氏（山口県立萩美術館・浦上記念館）に御教示をいただいた。
- 11 資料の鑑定・分析に関して、金属学的分析、放射性炭素年代測定（AMS測定）、貝類遺体鑑定を業者に委託し、その成果を第IV章に掲載した。
- 12 本書の作成・執筆は、上田・中里・荒蒔が共同で行い、編集は上田が行った。なお、執筆分担は、次のとおりである。

I 中里 II 中里 III 荒蒔（遺構）・中里（遺物）IV 業者 V 中里

## 本文目次

I	調査の経緯と概要	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査経過の概要	1
II	遺跡の位置と環境	4
1	地理的環境	4
2	歴史的環境	4
III	調査の成果	9
1	1地区	9
2	2地区	14
3	3地区	18
4	4地区	24
5	5地区	28
6	6地区	42
IV	自然科学分析	56
1	江の河原遺跡出土炉壁 鉄滓の分析調査	56
2	放射性炭素年代測定	63
3	江の河原遺跡から出土した貝類遺体	65
V	総括	67
1	調査の意義	67
2	調査結果の概略	67
3	遺物に関する所見	67
4	遺構に関する所見	68
5	まとめ	69

## 表目次

第1表	江の河原遺跡周辺に関わる史実等抜粋	8
第2表	遺物観察表	50
第3表	供試材の履歴と調査項目	59
第4表	供試材の化学組成	59
第5表	出土遺物の調査結果のまとめ	59
第6表	測定試料および処理	63
第7表	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	64
第8表	1地区SD1の貝類遺体	66

## 挿図目次

第1図	調査区位置図	2
第2図	江の河原遺跡 周辺遺跡図	5
第3図	江の河原遺跡の立地	6
第4図	江の河原の石造板碑	7
第5図	1地区 遺構配置図	10
第6図	1地区 壁面土層断面図	11
第7図	1地区 溝実測図	12
第8図	1地区 出土遺物実測図	13
第9図	2地区 遺構配置図	15
第10図	2地区 壁面土層断面図	16
第11図	2地区 土坑実測図	17
第12図	2地区 出土遺物実測図	17
第13図	3地区 遺構配置図	19・20
第14図	3地区 壁面土層断面図	21
第15図	3地区 掘立柱建物実測図	22
第16図	3地区 出土遺物実測図(1)	22
第17図	3地区 出土遺物実測図(2)	23
第18図	4地区 遺構配置図	25
第19図	4地区 壁面土層断面図	26
第20図	4地区 土坑実測図	26
第21図	4地区 土坑・柱穴・溝実測図	27
第22図	4地区 出土遺物実測図	27
第23図	5地区 遺構配置図	29・30
第24図	5地区 壁面土層断面図	31

第25図	5地区	掘立柱建物実測図	32
第26図	5地区	土坑・柱穴・溝実測図	33
第27図	5地区	出土遺物実測図(1)	34
第28図	5地区	出土遺物実測図(2)	35
第29図	5地区	出土遺物実測図(3)	36
第30図	5地区	出土遺物実測図(4)	37
第31図	5地区	出土遺物実測図(5)	38
第32図	5地区	出土遺物実測図(6)	39
第33図	5地区	出土遺物実測図(7)	40
第34図	5地区	出土遺物実測図(8)	41
第35図	5地区	出土遺物実測図(9)	41
第36図	6地区	遺構配置図	43
第37図	6地区	壁面土層断面図	44
第38図	6地区	掘立柱建物実測図	45
第39図	6地区	土坑・溝実測図	46
第40図	6地区	出土遺物実測図(1)	47
第41図	6地区	出土遺物実測図(2)	48
第42図	6地区	出土遺物実測図(3)	49
第43図		炉壁の顕微鏡組織	60
第44図		鍛冶滓の顕微鏡組織	61
第45図		炉壁(KOK-2)・椀形鍛冶滓(KOK-3)のEPMA調査結果	62
第46図		暦年校正結果	65
第47図	1地区SD1出土のイシガイ科殻皮		66
第48図		微地形復原図・主要遺物変遷図	70

## 図版目次

- |      |     |                  |      |       |                         |
|------|-----|------------------|------|-------|-------------------------|
| 図版1  | 調査区 | 全景(南東から)         | 図版12 | 5地区   | 全景(北から)                 |
| 図版2  | 調査区 | 全景(南西から)         |      | 5地区北端 | 完掘状況(西から)               |
| 図版3  | 調査区 | 遠景(北西から)         | 図版13 | 5地区   | 西壁土層(北東から)              |
| 図版4  | 1地区 | 全景(北から)          |      | 5地区   | 掘立柱建物(SB1~SB4)<br>(南から) |
|      | 1地区 | 西壁南側土層(南東から)     | 図版14 | 5地区   | SK1土層(東から)              |
|      | 1地区 | 東壁北側土層(南西から)     |      | 5地区   | SK3土層(南から)              |
|      | 1地区 | 北壁東側土層(南東から)     |      | 5地区   | SK3完掘状況(北から)            |
|      | 1地区 | 北壁中央土層(南東から)     |      | 5地区   | SP42土層(北から)             |
| 図版5  | 1地区 | 北壁西側土層(南から)      |      | 5地区   | SP43出土状況(南から)           |
|      | 1地区 | SD1完掘状況(北西から)    | 図版15 | 5地区   | 谷状落ち込み完掘状況<br>(北西から)    |
|      | 1地区 | SD1南東壁土層(西から)    |      | 5地区   | 北壁(谷状落ち込み)土層<br>(南西から)  |
|      | 1地区 | SD1礫出土状況(南東から)   | 図版16 | 6地区   | 全景(北から)                 |
|      | 1地区 | SD1土層(南東から)      |      | 6地区   | 西壁土層(南東から)              |
|      | 1地区 | SD2土層(南西から)      |      | 6地区   | 北壁西側土層(南東から)            |
|      | 1地区 | SD2完掘状況(南西から)    |      | 6地区   | 北壁中央土層(南東から)            |
| 図版6  | 2地区 | 全景(西から)          | 図版17 | 6地区   | 掘立柱建物(SB1・SB2)(北から)     |
|      | 2地区 | 東壁土層(南西から)       |      | 6地区   | SK1出土状況(西から)            |
| 図版7  | 2地区 | 西壁土層(東から)        | 図版18 | 6地区   | SK5土層(東から)              |
|      | 2地区 | SK19土層(南から)      |      | 6地区   | SK5完掘状況(東から)            |
|      | 2地区 | SK1土層(北から)       |      | 6地区   | SD1完掘状況(東から)            |
|      | 2地区 | SK1完掘状況(北から)     |      | 6地区   | SD2完掘状況(北から)            |
|      | 2地区 | SK13土層(西から)      |      | 6地区   | SD1土層(東から)              |
|      | 2地区 | SK13完掘状況(西から)    |      | 6地区   | 包含層遺物出土状況(西から)          |
| 図版8  | 3地区 | 全景(北から)          | 図版19 | 1・2地区 | 出土遺物                    |
|      | 3地区 | 北壁東側土層(南から)      | 図版20 | 3・4地区 | 出土遺物                    |
|      | 3地区 | 北壁西側土層(南から)      | 図版21 | 5地区   | 出土遺物(1)                 |
| 図版9  | 3地区 | 北壁中央土層(南西から)     | 図版22 | 5地区   | 出土遺物(2)                 |
|      | 3地区 | 西壁南側土層(南東から)     | 図版23 | 5地区   | 出土遺物(3)                 |
|      | 3地区 | 西壁土層(北から)        | 図版24 | 5地区   | 出土遺物(4)                 |
|      | 3地区 | SP1土器出土状況(北から)   | 図版25 | 5地区   | 出土遺物(5)                 |
| 図版10 | 4地区 | 全景(北から)          | 図版26 | 5地区   | 出土遺物(6)                 |
|      | 4地区 | 西壁土層(南から)        | 図版27 | 6地区   | 出土遺物(1)                 |
|      | 4地区 | 北壁土層(南から)        | 図版28 | 6地区   | 出土遺物(2)                 |
| 図版11 | 4地区 | SK1土層(南西から)      | 図版29 | 6地区   | 出土遺物(3)                 |
|      | 4地区 | SK4土層(南西から)      | 図版30 | 6地区   | 出土遺物(4)                 |
|      | 4地区 | SD1・SD2南側土層(北から) |      |       |                         |
|      | 4地区 | SD1中央土層(南から)     |      |       |                         |
|      | 4地区 | SK3・SP4土層(西から)   |      |       |                         |



# I 調査の経緯と概要

## 1 調査に至る経緯

美祿市東厚保町川東地内での農地整備事業（経営体育成型 川東西地区）の実施に先立ち、山口県美祿農林事務所から山口県教育委員会社会教育・文化財課に対して事業予定地内における埋蔵文化財の有無についての照会がなされた。これを受けて山口県教育委員会社会教育・文化財課は、平成21年1月11日から27日にかけて埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、柱穴・土坑・溝等の遺構が検出されるとともに、中世の遺物が出土しており、埋蔵文化財が存在することを確認した。山口県教育委員会社会教育・文化財課は、これを江の河原遺跡と命名し、周知の埋蔵文化財包蔵地に認定した。

この試掘調査結果と工事計画を照合したところ、工事によって埋蔵文化財が消失する部分があることが確認され、保護措置（記録保存のための発掘調査）が必要であることが判断された。これを受けて山口県美祿農林事務所と山口県教育委員会社会教育・文化財課の協議を経たうえで、平成25年度から平成26年度にかけて、公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センターが阿機岡より発掘調査の委託を受けるに至った。調査面積は1地区2454㎡、2地区696㎡、3地区1359㎡、4地区383㎡、5地区567㎡、6地区221㎡、計5,680㎡である。

## 2 調査経過の概要

現地調査を始めるにあたっては、山口県美祿農林事務所及び美祿市教育委員会との打ち合わせや調査区の現状確認・環境整備等を行い、近隣の小・中学校、警察署、消防署、自治会等に安全確保のための理解と協力を要請した。

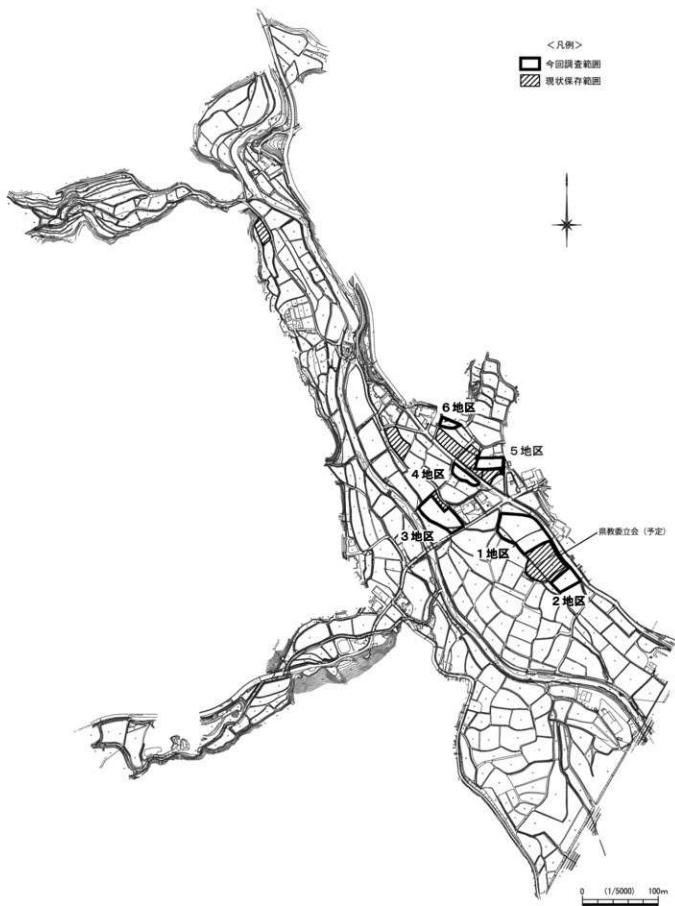
平成25年度の現地調査は、平成25年10月17日に仮設調査事務所を設置するとともに、重機によって1地区・2地区の表土除去を開始した。10月21日には発掘調査器材の搬入を行って、11月5日から人力による遺構検出を開始した。また、11月12・13日には、測量の基準となる国土座標杭を設置した。

遺構等の掘り込みを順次進めるとともに、調査員が埋土の堆積状況や遺物の出土状況等を写真や図面で記録化した。平成26年2月1日にはラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行い、2月5日には実機ヘリコプターによる空中写真測量を実施した。また、2月3日までは調査区壁面の土層断面を撮影・作図しており、2月10日には1地区・2地区の現地調査を終了し、山口県美祿農林事務所による完了確認を経て、現地の引き渡しを行った。

3地区から6地区にかけては、平成26年1月28日から重機による表土除去を開始し、2月10日から人力による遺構検出を実施、2月20日には国土座標杭を設置した。2月24日か



重機による表土除去作業



第1図 調査区位置図

ら遺構の掘り込みを進めるとともに、調査員が埋土の堆積状況や遺物の出土状況等を写真や図面で記録化した。3月18日にはラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施し、3月19日までは調査員による調査区壁面の土層断面の撮影・作図を終えた。なお、出土遺物は、現地調査中に随時山口県埋蔵文化財センターに持ち帰り、洗浄・接合等の整理作業を実施し、3月31日に平成25年度の調査を終了した。

平成26年度の現地調査は、調査計画および準備を経たうえで、4月8日に遺構配置図およびコンターラインの図化作業から開始した。4月14日に仮設トイレを設置したうえで、4月15日から人力による遺構の掘り込みおよび遺構の図化作業を行った。4月26日には現地説明会を実施し、地元の方をはじめとする約30人の見学があった。5月8日までに発掘器材等を撤収し、5月9日に現地調査を終了、山口県美祿農林事務所による完了確認を経て、現地の引き渡しを行った。

現地調査終了後は、かねてより進めていた記録類の整理を本格的に着手するとともに、出土遺物の実測図作成および写真撮影による記録化を行った。また、業者委託により年代測定や金属学的分析などの理化学的分析を行い、遺跡の総合的理解に対する助けとした。そして、これらの記録資料をもとに挿図および写真図版を作成しながら、原稿を執筆し、本報告書を刊行した。



作業風景



空中写真撮影



現地説明会

## II 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

美祿地域の地形・地質を大別すると、以下のようになる。

I：石灰岩台地。秋吉海山と呼ばれる海底火山に、サンゴ礁などの海洋生物の遺骸からなる石灰岩が堆積したもの。古生代末（約2億5千万年前）の形成と推定される。

II：山地・丘陵地。活発な火山活動によって形成された火成岩類で構成され、中国山地の基盤をなす。美祿地域では主に白亜紀後期（約9千万年前）に噴出された花崗岩類・火山岩類で構成されている。また、この頃の火山噴出による熱水活動によって、石灰岩と花崗斑岩の接触部に銅鉱床が生成されている。

III：砂礫台地（洪積台地）。美祿地域では丘陵に付随して小規模な分布をなす。更新世（約200万年～1万年前）に形成されたものであろう。

IV：自然堤防・扇状地・谷底平野・旧河道。断層などによって派生した地質の弱い部分が浸食され河川となり、下刻作用および洪水・氾濫堆積などによって形成される一連の地形。美祿地域では谷底平野が大半を占め、自然堤防・扇状地の分布は限定的である。

V：人工改変地であり、旧地形をとどめていない。現代。

以上は、概ねIからVの順に形成され、現在に至っている。

美祿地域の集落遺跡は、砂礫台地（洪積台地）での立地を基本とし、丘陵上や自然堤防上での立地がこれに準ずる。一方、扇状地は狭小なため、雨水が伏流水として地下に浸透しきれず、飽和状態に近い状況を呈している。このため、土地条件が不安定であり、集落の立地に不適なようである。

江の河原遺跡の周辺では、平原川（江の河原川）が丘陵を開析して氾濫平野を形成している。また、この平原川（江の河原川）に流れ込むような谷地形が、丘陵および砂礫台地を分断するように形成されている。そして、この谷地形に埋積する扇状地上に江の河原遺跡のほとんどが立地しており、これまでの美祿地域の集落遺跡の立地と異なる点に、大きな特徴が見出せる。

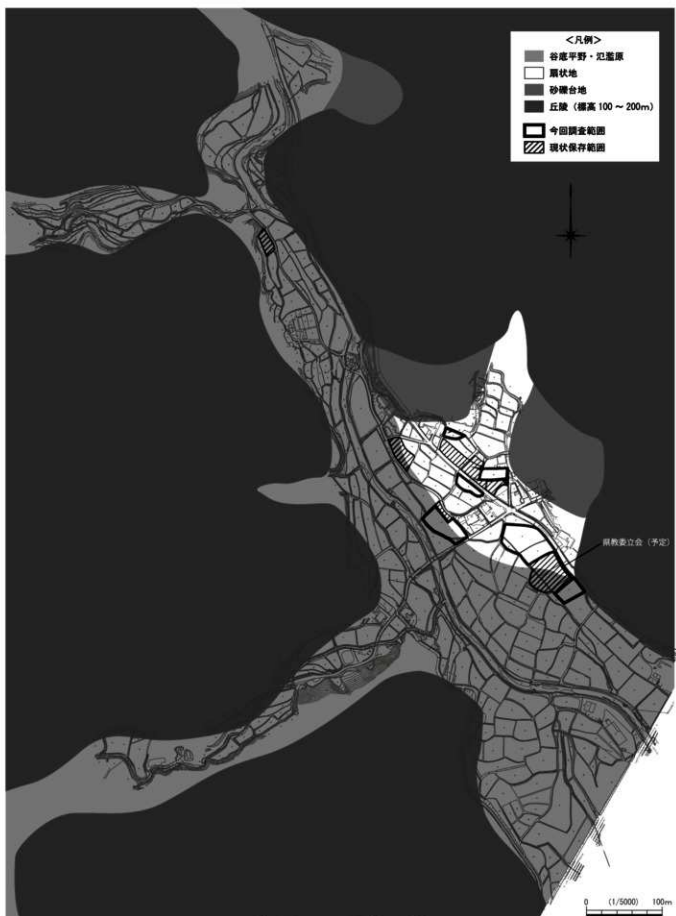
### 2 歴史的環境

江の河原遺跡の周辺では、大嶺盆地や西厚保地域において縄文・弥生時代以降の遺跡が確認されている。一方、江の河原遺跡では古代以前の資料が皆無に等しく、中世に開発された地域といえようである。以下、中世について概略する。

中世に入ると、山口県内で以前には困難だった土地条件にも開発の手が及ぶようになっていく。このことを端的に示すのが、海浜部における干潟の耕地化と、山間部における谷間の開発である（田中2012）。江の河原遺跡の周辺では、南原寺が麓にある永谷を1335（建武2）年までに新たに開発している。また、正法寺領香野では、1306（嘉元4）～1334（建武元）年までの記録に「開発田并荒野」「田地荒野」などと記されており（高橋1982）、まだ開発途中段階であることを如実に示している。いずれも山間部の谷間もしくは狭小な谷底平野であり、中世における耕作地拡大のあり方を示す典型例といえる。

江の河原遺跡も同様の位置づけが可能であり、狭小な谷底平野に展開する耕作地に伴う用水路（13





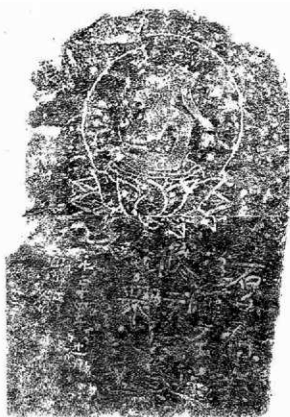
第3図 江の河原遺跡の立地

世紀後半～末)が今回の調査で検出された。

一方、中世は、耕作地の支配権を巡ってさまざまな軋轢が表面化している時代でもある。江の河原遺跡周辺においては、厚保の地頭である厚氏が正法寺領を蓋妨し、1334(建武元)年に正法寺に訴えられたり、大嶺の地頭由利氏が沓野村の正法寺領を侵略し、1408(応永15)年に正法寺が大内盛見に訴状を提出している記録が残っている。

15世紀後半以降はそうした記事が稀となるが、大内氏による支配が安定したためかもしれない。15世紀後半～16世紀頃に江の河原遺跡のピークが一つあり、その象徴として、江の河原の石造板碑があげられる。美祿市域ではこの頃に板碑建立がよくなされており、それが可能な財力と信仰が存在していたことが示される。

近世に入ると赤間関街道筋に位置するため、一定の役割を担っていたものと推定されるが、調査では遺物の出土が少量認められるものの、詳細を明らかにすることはできなかった。



第4図 江の河原の石造板碑  
(美祿市教育委員会提供)

#### 参考文献

- 小野実・中野達之 1996『本郷遺跡』山口県教育委員会  
河村芳久 2000『東分中村経塚』美祿市教育委員会  
國森進 2012「第二編第一章第三節 耕地の拡大」『山口県史 通史編 中世』山口県  
高橋正清 1982「第五編 中世」『美祿市史』美祿市  
田中倫子 2012「第五編第一章第一節 諸産業の発達」『山口県史 通史編 中世』山口県  
辻誠一郎 2008「第一編第二章第二節 山口県の基盤形成」『山口県史 通史編 原始・古代』山口県  
内藤源太郎 1982「第一編 一 地質概略」『美祿市史』美祿市  
内藤源太郎 1982「第二編 一 地形」『美祿市史』美祿市  
美祿市長登銅山文化交流館 2000『長登銅山文化交流館展示図録』  
山口県 2012「第二編第四章第三節 美祿郡」『山口県史 通史編 中世』山口県

第1表 江の河原遺跡周辺に関わる史実等抜粋

	年代	大嶺盆地	厚保地域	南原寺・板碑・経塚など	
12世紀後半	1076(承保3)以前	大塚庄が石清水八幡宮領となる			
	1108(天仁元)	大塚庄の文献初見			
				南原寺経塚・東分中村経塚	
	1185(文治元)	石清水八幡宮領として大塚庄あり			
				四桑天皇が南原寺に里を多く寄進	
	13世紀前半				
元寇	1256(建長6)	地頭が大塚庄に課役することに対し、幕府がこれを停止する			
	1274(文永11)				
14世紀後半	1281(弘安4)				
		この頃、由利氏が地頭職に就き、家化したものと考えられる			
	1306(徳治元)		厚保の地頭厚氏が、香野にある正法寺領を蓋勘する(厚氏の文献初見)		
	1333(元弘3)	大嶺合戦に、大嶺の地頭由利氏が参戦	大嶺合戦に、厚保の地頭厚氏が参戦		
	1334(建武元)		厚氏が正法寺領を蓋勘し、正法寺に訴えられる		
	1335(建武2)			南原寺が開発した田地を、寄進という形で承認される	
	1336(建武3)			南原寺の供料田に大嶺下領あり	
	1338(建武4)			堂下の自然石板碑建立	
		1375(永和元)	石清水八幡宮社家の造営期間中、大塚庄と於福村に軍役に課することを固く停止するよう、大内弘世に沙汰する この頃、厚東氏滅亡。その後、由利氏は大内氏に仕えるようになる。		
	15世紀前半	1402(応永9)			南原寺住僧真海が、大内義弘の菩提寺である香積寺に決議を寄進
1408(応永15)			大嶺の地頭由利氏が、香野村の正法寺領を侵略し、正法寺が大内盛見に訴状を提出する。		
1425(応永32)			神功皇后社建立		
1454(享徳3)				南原寺火上し、証文類消失	
15世紀後半	1479(文明11)	この頃には、大内氏の重臣である杉氏が大嶺を支配	厚氏が大内氏の郡代か都奉行として厚保地方を管する		
	1490(明応8)	大塚庄の八幡宮が、上領八幡宮と下領八幡宮に分かれる			
	1510(永正7)			二ツ堂経塚	
	1516(永正13)			日本の佛法講板碑建立	
	1517(永正14)			江の河原の石造板碑建立。願主は徳柳。	
	1518(永正15)～			藤ヶ河内の自然石板碑5基建立。徳柳が本願。	
	1534(天文3)以前	大内氏の重臣である内藤氏が大嶺下領を拝領。大嶺庄八幡宮(下領八幡宮)に毎年御祈念米を奉納。			
毛利時代	1557(弘治3)				
	1560(永禄3)以前	大塚庄と石清水八幡宮との関係がなくなる			
	1566(文禄5)	このころ、大嶺に市が開く			
17世紀前半					
	1625(寛永2)			南原寺の浮米10石に定められ、藩政時代の寺領高となる	

※高橋政清 1982・河本芳久 2000・山口陽 2012 を元に作成



### Ⅲ 調査の成果

#### 1 地区

##### (1) 遺構

1 地区は、標高約67.5mに位置し、北西は県道233号線（推定赤間関街道）、北東は県道235号線が走行する。平原川（江の河原川）に向かい標高が低くなる。

1 地区の基本土層は、表土以下、旧耕作土、盤土、地山で構成されている。また、水捌けの悪い地質のため北西側の一部でグライ化している。遺構は、柱穴250個（杭穴を含む）、溝2条を検出した。以下、主な遺構について述べる。

##### 溝

**SD 1（第7図）** 調査区南側に位置する。北西から南東に流下し、南東は調査区外に延びる。SD 2と重複しており、新旧関係はSD1が新しい。規模は長さ37m以上、幅0.3～1.9m、検出面からの深さ25～40cmである。埋土は灰白色～黄褐色で砂礫混じりを基調とする。遺物は土師器、瓦質土器、磁器が出土している。遺構の時期は中世前半である。

**SD 2（第7図）** 北西から南東に流下し、南は調査区外へ延びる。規模は長さ10.6m以上、幅0.4～1.5m、検出面からの深さ9～19cmである。埋土は灰褐色～灰白色で砂質粘土を基調とする。形状などから自然流路と考えられる。遺物の出土はなく、遺構の時期も不明である。

##### (2) 遺物

1 地区から出土した遺物は少量で、かつ、ローリングによる劣化が著しいものが多い。1 地区自体で使用されたのではなく、3 地区や5 地区などの居住域に本来帰属していたことを想定している。

時期は中世を主体とし、近世が少量含まれており、江の河原遺跡における居住域・耕作地の存続時期を大まかに示している。このほか、縄文時代かと思われる安山岩割片が1点出土している。

##### 柱穴出土遺物（第8図）

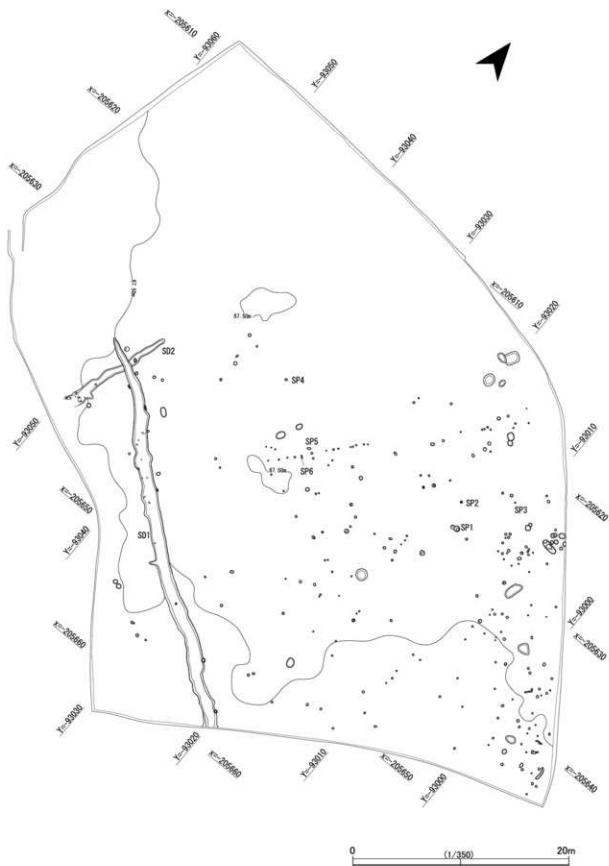
1はSP1より出土した瓦質土器播鉢である。内面にハケ目が明瞭に残ることから、15世紀の所産と考えられ、SP1の埋没時期の上限を示す。

##### 溝出土遺物（第8図）

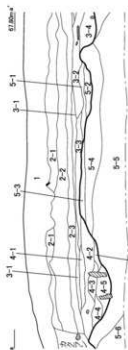
2～9はSD1より出土。土師器杯は2が直線的な体部であり、14世紀以降と考えられるが、3は比較的外に開く形状をなしており、13世紀的な特徴を残す。土師器皿は4・5ともに口径約7cm、器高1cm以下で、かつ、器壁が厚く、14世紀前半～中頃の所産である。6は龍泉窯青磁碗で大宰府分類Ⅱ（13世紀前半～中頃）、7は白磁小皿で大宰府分類ⅦもしくはⅧ類と考えられる。8・9は瓦質土器鍋で西長門型a類であり、口縁部の形状から14世紀の所産と考えられる。このほか、炉壁の破片が出土しており（第43図）、5地区からの流れ込みを想定できる。

これらの出土遺物は、本来居住域に帰属するものと考えられ、その存続時期をおおまかに示すものと考えられる。また、出土遺物から、SD1の埋没時期の上限は14世紀と判断できる。

また、イシガイ科の貝類が5点出土しており（第47図）、SD1が水路として機能していたとする推定



第5図 1地区 遺構配置図



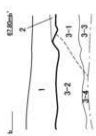
壁面土層①

- 1 黄土 灰色 (M4.0) 砂礫混じり 砂質土、しりり良い
- 2-1 回轉作土 灰色 (S74/1) 砂礫混じり 砂質土、しりり良い Fe 凝点状に含む
- 2-2 回轉作土 灰色 (M4.0) 砂礫混じり 砂質土、しりり良い Fe 凝点状にまばらに含む
- 3-1 黄土 土 7 緑灰色 (10076/1) 砂質土、やや粘り ややグライ化
- 3-2 黄土 土 7 緑灰色 (7395/1) 凝結した砂質土 Fe 凝点に含む
- 3-3 黄土 土 7 緑灰色 (7395/1) 凝結した砂質土 Fe 凝点に多く含む
- 4-1 黄土 土 7 緑灰色 (10074/1) 凝結した砂質土、やや粘り
- 4-2 黄土 土 オリーブ灰色 (25976/1) 凝結
- 4-3 黄土 土 灰色 (7395/1) 砂礫混じり 土、やや粘り
- 4-4 黄土 土 灰色 (7395/1) 砂礫混じり 土、しりり良い
- 4-5 黄土 土 灰色 (7395/1) 砂礫混じり 土、しりり良い
- 5-1 地 山 7 明緑灰色 (10072/1) シルト、泥質土が混じる、グライ化
- 5-2 地 山 7 灰色 (S76/1) シルト、やや粘り、部分的にグライ化する
- 5-3 地 山 明緑灰色 (10072/1) シルト、しりりや良い
- 5-4 地 山 灰色 (S75/1) 砂礫混じり
- 5-5 地 山 緑灰色 (10074/1) 凝結したシルト
- 5-6 地 山 緑灰色 (10074/1) 粘土



壁面土層③

- 1 黄土 土
- 2 回轉作土 1と3-1の混成
- 3-1 回轉作土 褐色 (M2.0) 砂質土、粘り強く含む
- 3-2 回轉作土 灰色 (S75/1) 砂質土、黄褐色土、黄褐色土 (Fe)<sup>2+</sup> 多く含む 赤土層面が3-1と同一層
- 3-3 回轉作土 灰オリーブ灰色 (S75/2) 砂質土、凝結含む
- 4 黄土 土
- 5 地 山 黄褐色 (25976/6) 砂質土、しりり良い



壁面土層②

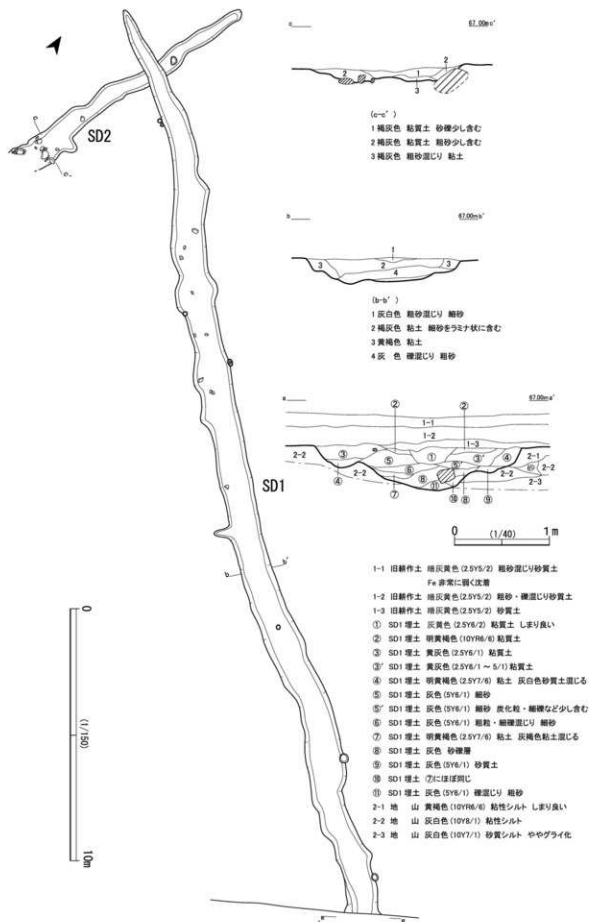
- 1 黄土 土
- 2 黄土 土
- 3-1 地 山 灰白色 (1076/1 ~ 7/1) 凝結したシルト、わずかにグライ化
- 3-2 地 山 緑灰色 (10074/1) 凝結したシルト、グライ化
- 3-3 地 山 明黄褐色 (10767/6 ~ 237/6) シルト
- 3-4 地 山 緑灰色 (10074/1) シルト、グライ化



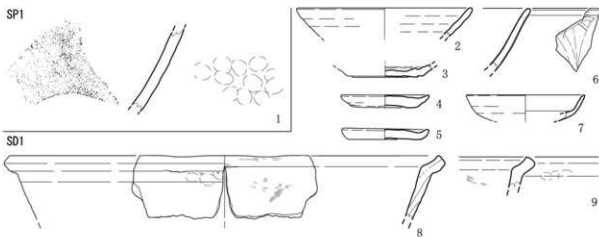
壁面土層④

- 1 黄土 土
- 2 黄土 土
- 3 黄土 土
- 4 地 山 におい黄褐色 (25976/3 ~ 5/2) 粘性シルト
- ① 遺埋物土 灰褐色 (10765/2) 砂質土、小礫少し含む
- ② 遺埋物土 黄褐色 (25974/1) 粘質土

第6図 1地区 壁面土層断面図

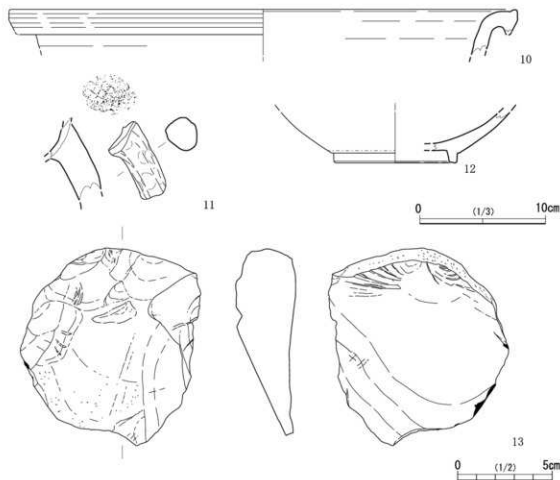


第7図 1地区 溝実測図



遺構外

11-12: 遺構検出、10-13: 表面採集



第8図 1地区 出土遺物実測図

と矛盾しない。

#### 遺構外出土遺物(第8図)

10は常滑焼甕であり、口縁部の形状から13世紀後半の所産と考えられる。11は瓦質土器足鍋である。体部との接合面で剥離しており、剥離面に格子タタキ痕が確認される。12は深川産陶器鉢である。13は比較的大形の安山岩剥片である。このほか、炉壁の破片が出土している(第43図)。

## 2 2地区

### (1) 遺構

2地区は1地区の南約50m、標高約66mに位置する。

2地区の基本土層は1地区と同じで、黄褐色～赤褐色の地山である。ただし、北西隅付近は黄褐色の礫混じり粘土、南東隅付近は灰褐色の強粘質土の地山となり均質でない。

遺構は柱穴197個（杭穴を含む）、土坑19基、溝3条を検出した。

#### 土坑

**SK1（第11図）** 調査区西側に位置する。平面形は円形である。規模は径34cm、検出面からの深さ12cmである。遺物は瓦質土器鍋の口縁部片1点出土したのみである。遺構の時期、性格は不明である。

**SK13（第11図）** 調査区南に位置する。平面形は楕円形である。規模は長径1.1m、短径52cm、検出面からの深さは浅い部分で4cm、深い部分で28cmになる。遺物は土師器小片が出土している。遺構の時期、性格は不明である。

**SK19（図版7）** 調査区北東壁に位置する。平面形は円形、もしくは楕円形と思われるが、東側が調査区外に延びるため不明である。残存規模は長径約70cm、短径30cm以上、検出面からの深さは約40cmになる。遺物は土師器碗の底部片が出土している。遺構の時期は中世以降と考えられる。

### (2) 遺物

2地区から出土した遺物は極めて少量で、かつ、ローリングによる劣化が著しいものが多い。これらは3地区や5地区などの居住域に本来帰属するものと想定している。時期は中世を主体とし、江の河原遺跡における居住域・耕作地の存続時期を大まかに示している。

#### 土坑出土遺物（第12図）

14はSK11、15はSK19より出土した土師器杯である。両者とも13世紀後半～14世紀の所産と考えられ、土坑の埋没時期の上限を示す。

#### 柱穴出土遺物（第12図）

16はSP21より出土した土師器皿である。復元された法量から14世紀以降の所産と考えられ、柱穴の埋没時期の上限を示す。

#### 遺構外出土遺物（第12図）

17～19は青磁碗である。17は内面に圈線を2条巡らし、外面には蓮弁文らしき表現がかすかにみられる。18は13世紀代、19は角高台であり12世紀末～13世紀初頭のものとして推定される。20は瓦質土器足鍋であり、口縁部の形状から15世紀後半（岩崎編年Ⅲ新形式）の所産である。21は瓦質土器播鉢であり、口縁部の形状および、内面ハケ目の残存状況から、15世紀後半以降の所産である。

これらは本来、3地区や5地区近辺の居住域に所属していた可能性が考えられる。

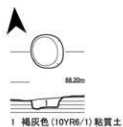




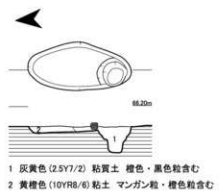
第10図 2地区 壁面土層断面図



SK1



SK13



0 (1/40) 1m

第11図 2地区 土坑実測図

SK11



SK19

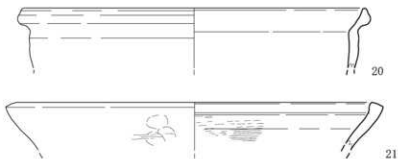
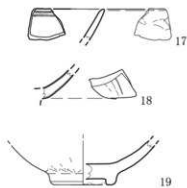


SP21



遺構外

17-18-20-21:遺構検出, 19:客土



0 (1/3) 10cm

第12図 2地区 出土遺物実測図

### 3 3地区

#### (1) 遺構

3地区は、1地区から県道233号線を挟んだ北西約50mに位置する。標高は約67.8mである。南は田を挟み平原川(江の河原川)が流れる。

表土以下から客土までは他地区と同様であるが、河川の氾濫堆積と推測される礫層が北東から南西へと扇状に広がり調査区の基盤を形成する。また、調査区東側において、明黄褐色の地山に多量のマンガンを含む層も確認した。

遺構は主に調査区中央付近から東側にかけて多く検出した。遺構は掘立柱建物1棟、柱穴158個、土坑3基、溝1条を検出した。

#### 掘立柱建物

多くの柱穴が検出されたが、復元できたものは1棟のみである。

**SB1(第15図)** 調査区中央付近に位置する。規模は2間×1間で、桁行2.7m、梁行1.6mである。棟方向はN2°Eである。構成柱穴SP12から土師器杯片が出土した。遺構の時期は不明である。

#### 柱穴

**SP1(図版9)** 調査区中央付近に位置する。長径35cm、短径27cm、深さ8cmの柱穴である。SP1に対応する構成柱穴は確認できない。遺物は、柱穴上面から瓦質土器搦鉢が出土した。遺構の時期は中世と考えられる。

**SP39** 調査区東に位置する。長径40cm、短径34.5cm、深さ43.5cmの柱穴である。SP39に対応する構成柱穴は確認できない。遺物は、土師器杯・皿が出土した。遺構の時期は14世紀前半～中頃と考えられる。

#### (2) 遺物

3地区から出土した遺物は少量であるが、柱穴・土坑から土師器杯・皿類を主体に中世の遺物が出土している。これらは3地区および近辺の居住域の存続時期を大まかに示すものと考えられる。

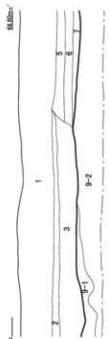
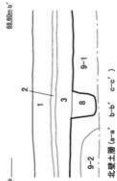
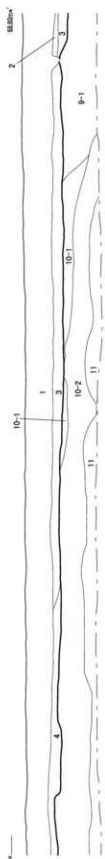
#### 土坑出土遺物(第16図)

22はSK1より出土した土師器杯であり、底部内面はロクロ目が明瞭に残る。23はSK2より出土した土師器皿である。いずれも13世紀後半～14世紀前半の所産と考えられ、各土坑の埋没時期の上限を示す。

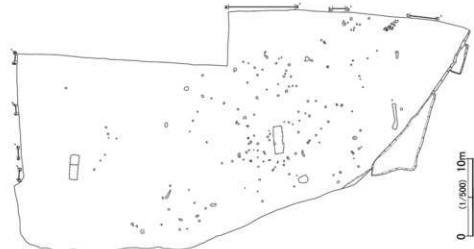
#### 柱穴出土遺物(第16図)

24はSP1より出土した瓦質土器搦鉢である。硬く焼き締まった須恵質に近い焼成であり、かつ、外面は指オサエ痕が密に残るなど、通常の瓦質土器とは異なる特徴を示す。内面にハケ目が残る点、卸目が5条確認できることから15～16世紀の所産と考えるが、今後の追検証は必要である。25～40は土師器杯・皿であり、このうち、26～37はSP39よりまとまって出土している。また、図示していないが、炭化材が出土している。杯は底部と体部の境が湾曲するタイプ(26～28)、屈曲するタイプ(29・33)、両者の中間的タイプ(30・31)が確認でき、かつ、これらが共存することが確認できる。皿(35～37)は器高が低く、14世紀前半～中頃の所産と考えられる。これらは柱穴の埋没時期の上限を示している。





- 北壁土層 (a-e, b-b', c-c')
- 1 表土 黄褐色 (2.5Y5/6) 粘質土
  - 2 厚土 灰黄色 (10Y7/7) 粘質土
  - 3 田耕作土 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 細粒質土
  - 4 深土 黄色 (2.5Y5/2) 粘質土、小片礫含む
  - 5 深土 明黄褐色 (10Y6/8) 粘質土、小片礫含む
  - 6 田耕作土、オリーブ黄色 (7.5Y6/2) 細粒質土
  - 7 深層腐土? 明褐色 (7.5Y5/8) 粘質土、土砂層小片、マンガンを含む
- 8 柱穴埋土、灰オリーブ色 (5Y5/2) 粘質土、礫含む
  - 9 地山 黄褐色 (10Y7/7) 粘質土
  - 9 地山 明黄褐色 (10Y6/8) 粘質土、上部に多量のマンガンを含む
  - 10-1 河川堆積 明黄褐色 (10Y6/8) 砂質土、礫層を多量に含む
  - 10-2 河川堆積 にぶい黄褐色 (5Y6/4) 砂質土、大小礫を多量に含む
  - 11 地山 明黄褐色 (2.5Y6/8) 砂質土、礫含む

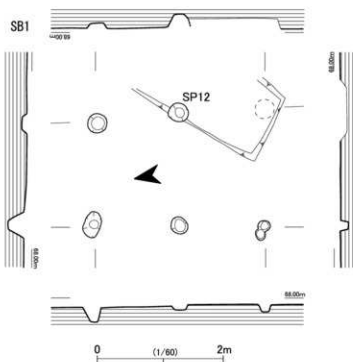


- 西壁土層 (d-d', e-e', f-f', e-e')
- 1 田耕作土
  - 2 香土?
  - 3 深土 灰色
  - 4 深土 (Fe含む)
  - 5-1 地山 黄褐色 (10Y7/7) シルト
  - 5-2 地山 にぶい黄褐色 (10Y6/4) 砂質シルト、中礫少し含む、マンガンを含む
  - 5-3 地山 にぶい黄褐色 (10Y6/4) 砂質シルト→粘砂、マンガンを含む
  - 6 河川堆積 (礫層)

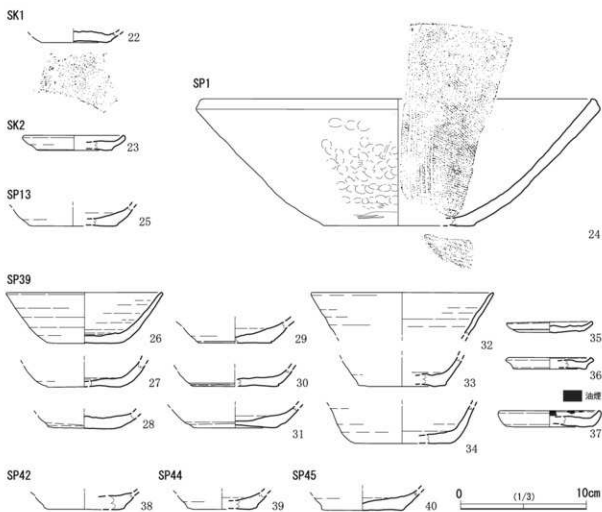
0 (1/500) 10m

0 (1/40) 1m

第14図 3地区 壁面土層断面図

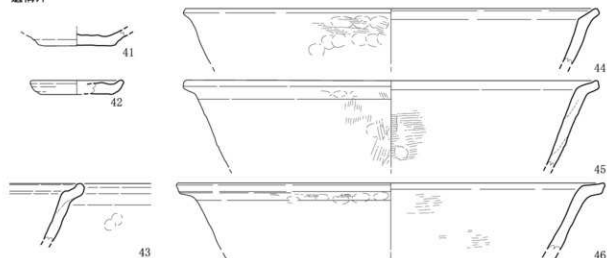


第15图 3地区 掘立柱建物实测图

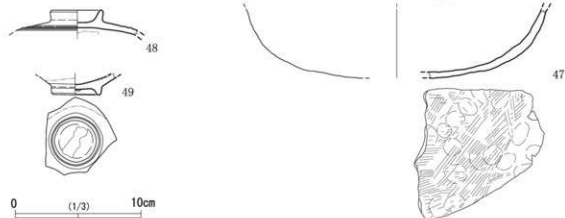


第16图 3地区 出土遺物实测图(1)

遺構外



41～43・47：遺構検出  
44～46・49：客土・耕土  
48：表面採集



第17図 3地区 出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物(第17図)

41は土師器杯であり、底部内面はロクロ目が残る。42は土師器小皿であり、SP39出土のものと同様に浅い器形であり、14世紀前半～中頃の所産と考えられる。43～47は土師質土器の鍋である。口縁部の形状から、46は13世紀に遡る可能性があるが、概ね14世紀代の所産と考えられる。48は瀬戸・美濃系陶器の行平鍋の蓋、49は肥前系陶器椀である。

## 4 4地区

### (1) 遺構

調査区は3地区より北東へ約50m、標高約70mの位置にある。

基本土層は表土以下、他地区と同様であり、水捌けが悪く1地区同様、一部地山がグライ化している。

検出した遺構は柱穴18個(杭穴を含む)、土坑6基、溝2条を検出した。以下、主な遺構を取り上げる。

#### 土坑

**SK1(第20図)** 調査区東に位置する。平面形は不整形円形と考えられる。南は攪乱により切られる。検出規模は長径86cm、短径60cm以上、検出面からの深さ10cmである。また、一部に深さ30cmの柱穴状に深くなる部分がある。土師器小片が出土した。遺構の時期、性格は不明である。

**SK2(第20図)** 調査区東端に位置する。平面形は楕円形である。規模は長径63cm、短径40cm、検出面からの深さ15cmである。土師器小片、陶器小片が出土した。遺構の時期、性格は不明である。

**SK3(第21図)** 調査区東端に位置する。遺構の北はSP4を切り、南は攪乱により切られる。遺構の平面形は南へ扇状に広がる。検出規模は長径80cm以上、短径約70cm、検出面からの深さ5～12cmである。北西から南東に向い深さ5cm程度の小規模な溝状の落ち込みをみる。遺物は、土師器小片が出土した。遺構の時期、性格は不明である。

**SK6(第21図)** 調査区中央付近に位置する。平面形は不整形円形である。規模は、径48cm、深さ17cmである。遺物は土師器小片が出土した。遺構の時期、性格は不明である。

#### 溝

**SD1(第21図)** 調査区中央東寄りに位置する。北東～南西方向へ流下し、南西側でSD2と重複し調査区外へ延びる。新旧関係は本遺構が新しい。検出規模は、長さ3.0m以上、幅20～75cm、深さ3～43cmである。遺物は、土師器片、瓦質土器片、陶器片が出土した。遺構の時期、性格は不明である。

**SD2(第21図)** 調査区中央東寄りに位置する。北～南方向へ流下し、途中南西へ屈曲する。一部がSD1と重複し調査区外へ延びる。新旧関係は本遺構が古い。検出規模は、長さ1.2m以上、幅18～60cm以上、深さ13～24cmである。遺物は土師器片が出土した。遺構の時期、性格は不明である。

### (2) 遺物

4地区から出土した遺物は極めて少量であり、図示できたのは5点到留まる。

#### 土坑出土遺物(第22図)

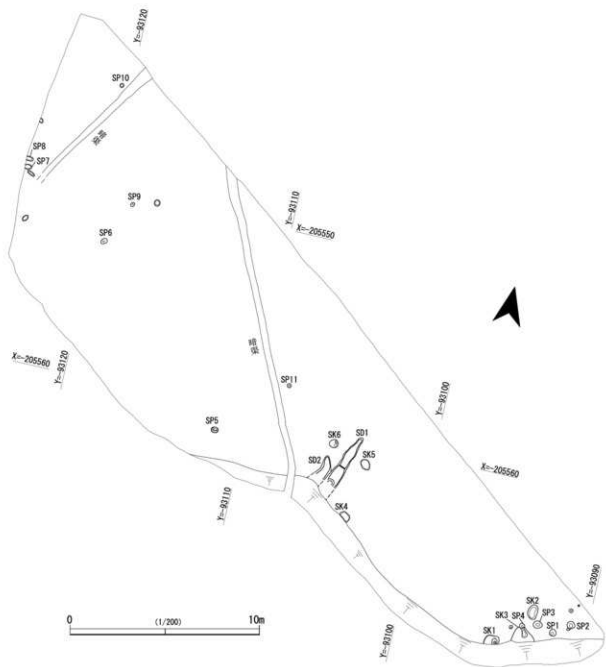
50はSK3出土の土師器杯である。13世紀後半～14世紀の所産と考えられ、埋没時期の上限を示す。また、椀形鍛冶滓が出土している(第44図)。

#### 柱穴出土遺物(第22図)

51はSP1出土で、鉄釘と判断している。

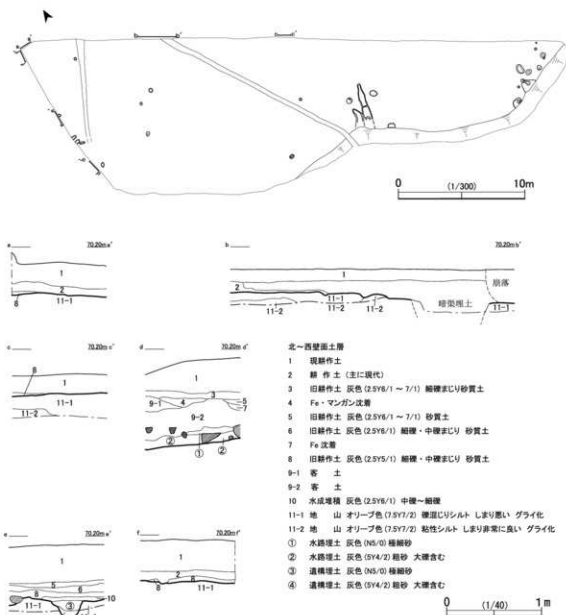
#### 溝出土遺物(第22図)

52～54はSD1より出土している。52は土師器杯で、ハケ目らしき痕跡がかすかに認められ、底部と体部は別作りの可能性がある。53は土師器皿で、14世紀以降のものと考えられる。54は瓦質土器であるが、硬く焼き締まった須恵質に近い焼成である。頸部に突線が1条巡る。

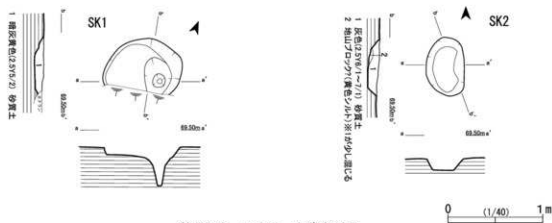


第18图 4地区 遺構配置図





第 19 図 4 地区 壁面土層断面図



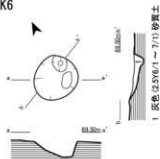
第 20 図 4 地区 土坑実測図

SK3・SP4



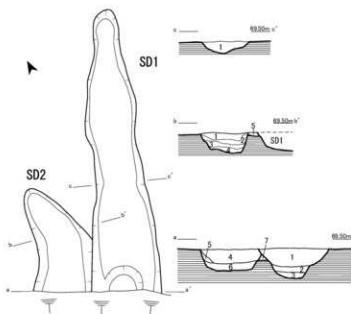
- 1 灰色(2.5Y6/1) 砂質土 マンガン弱く沈着
- 2 灰色(2.5Y6/1) 砂質土 細礫含む少し含む 黄色少し含む
- 3 灰色(2.5Y6/1) 砂質土

SK6



- 1 灰色(2.5Y6/1 ~ 7/1) 砂質土

0 (1/40) 1 m



SD1 ベルト土層 (a-a')

- 1 灰色(2.5Y5/1 ~ 6/1) 砂質土 中礫含む マンガン弱く沈着

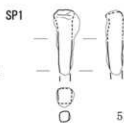
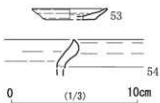
SD2 ベルト土層 (b-b')

- 1 灰色(2.5Y6/1) 砂質土 マンガン弱く沈着
- 2 灰色(2.5Y6/1) 砂質土 マンガン弱沈着  
地山ブロック(黄色シルト)含む
- 3 灰色(2.5Y6/1) 砂質土 マンガン弱く沈着
- 4 灰色(2.5Y6/1 ~ 7/1) 砂質土 マンガン弱沈着  
地山ブロック(黄色シルト)多く含む
- 5 灰色(2.5Y6/1 ~ 7/1) 砂質土 (別遺構)

SD1-2 ベルト土層 (a-a')

- 1 灰色(2.5Y5/1 ~ 6/1) 砂質土 中礫含む マンガン沈着
- 2 灰色(2.5Y5/1 ~ 6/1) 砂質土 やや粘性 砂礫少し含む  
マンガン沈着
- 3 灰色(N6/0 ~ 5/0) 粘土
- 4 灰色(2.5Y6/1) 砂質土 細礫含む マンガン弱く沈着
- 5 灰色(2.5Y6/1) 砂質土 地山ブロック(黄色シルト)含む
- 6 灰色(2.5Y6/1 ~ 7/1) 砂質土
- 7 灰色(2.5Y6/1 ~ 7/1) 砂質土

第21図 4地区 土坑・柱穴・溝実測図



第22図 4地区 出土遺物実測図

## 5 5地区

### (1) 遺構

調査区は4地区から北東へ約20mにあり、標高約70.5mの扇状地上に立地する。基本土層は表土以下、耕作土、盤土、旧耕作土、地山となる。また、ほぼ全層から細～大礫が混じる。

遺構は調査区西から中央付近に集中してみられる。中央から東は土坑1基と谷状の落ち込みを検出するのみである。検出した遺構は、掘立柱建物4棟、柱穴148個、土坑5基、溝2条を検出した。以下、主な遺構を述べる。

#### 掘立柱建物

調査区のはほぼ西側に4棟が集中して確認できた。

**SB1 (第25図)** 調査区西側に位置する。規模は2間×1間で桁行3.0m、梁行1.6mである。棟方向はN49°Wである。構成柱穴であるSP47、SP59、SP61から土師器杯片が出土した。遺構の時期は中世以降である。

**SB2 (第25図)** 調査区西側に位置する。南西側の柱穴は調査区外と推定される。規模は2間×1間で桁行3.4m、梁行2.0mである。棟方向はN54°Wである。構成柱穴であるSP25、SP28、SP44からは土師器小片が出土している。遺構の時期は中世以降である。

**SB3 (第25図)** 調査区西側に位置し、SB2、SD1と重複する。構成柱穴のうちSP57はSD1直下から検出した。規模は2間×1間で桁行3.5m、梁行2.0mである。棟方向はN43°Eである。構成柱穴であるSP37、SP39、SP57から土師器小片が出土した。遺構の時期は中世以降である。

**SB4 (第25図)** 調査区中央東寄りに位置する。規模は2間×1間で、桁行2.9m、梁行2.0mである。棟方向はN9°Wである。構成柱穴であるSP15から瓦質土器片、土師器片が、SP34、SP68からは土師器小片が出土した。遺構の時期は中世以降である。

#### 土坑

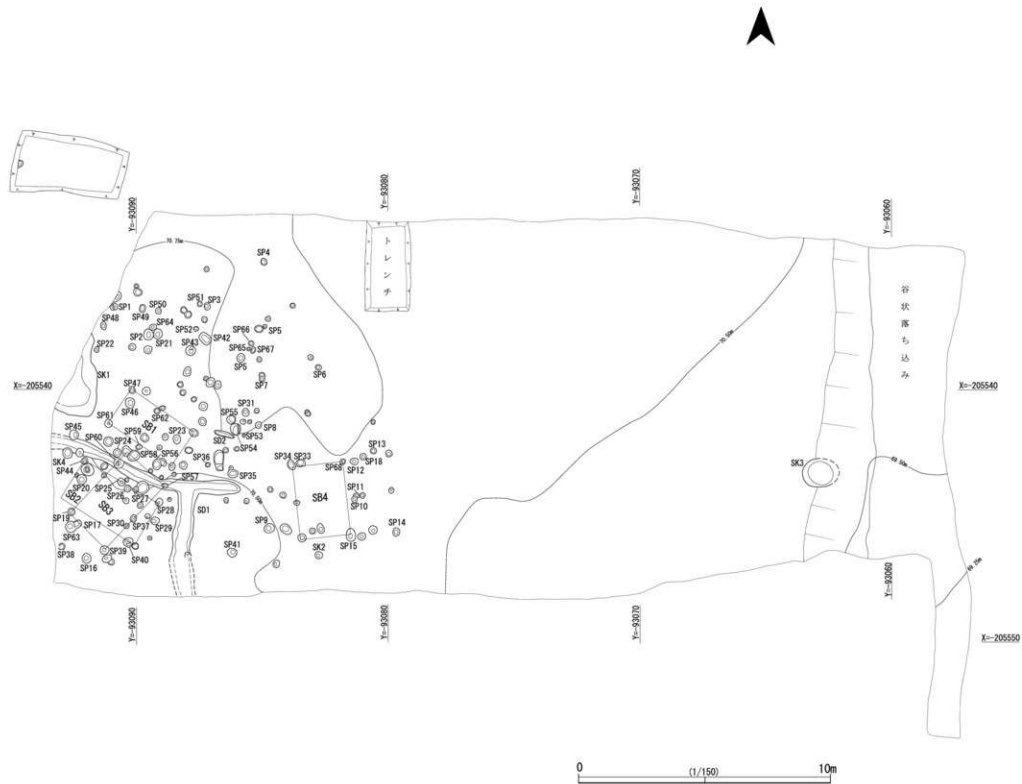
**SK1 (第26図)** 調査区西端に位置する。遺構の西側は調査区外である。検出規模は長軸3.28m、短軸1.45m、検出面からの深さ10～25cmである。北へ向かうにつれ、徐々に高くなる。埋土は、灰色、灰褐色土層を中心に構成され、ほぼ全層で焼土・炭化ブロックを含んでいる。遺物は土師器杯、瓦質土器插鉢、焼土塊、炭化材が出土した。遺構の時期は中世以降である。

**SK3 (第26図)** 調査区東に位置する。一部は谷状の落ち込みによって消失している。遺構の平面形は円形である。規模は残存部径1.2m、検出面からの深さ20cmである。遺物は土師器小片が出土した。遺構の時期、性格は不明である。

**SP42 (第26図)** 調査区北西に位置する。平面形は楕円形である。規模は長径54cm、短径39cm、検出面からの深さ40cmである。土層の観察などから柱抜き取り痕を確認した。遺物は土師器杯片が出土した。遺構の時期、性格は不明である。

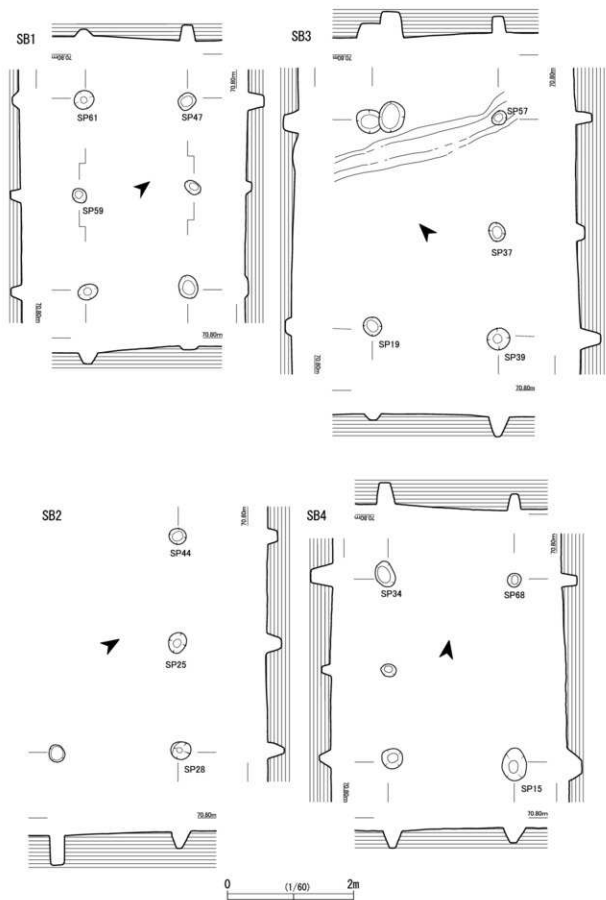
#### 溝

**SD1 (第26図)** 調査区西側に位置する。ほぼ東西方向に流下し、南へ流れる部分と合流する。検出規模は東西7.3m以上、合流地点から南へ2.8m以上、深さ7～9cmである。遺物は瓦質土器插鉢、瓦質土器足銅片、白磁片、不明鉄製品、被熱石、焼土塊などが出土した。遺構の時期は中世以降である。

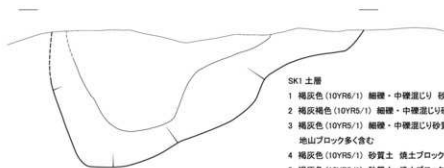
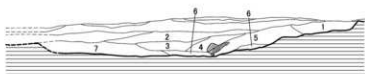


第 23 図 5 地区 遺構配置図





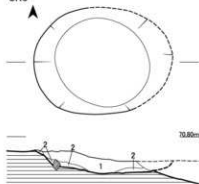
第 25 图 5 地区 掘立柱建物实测图



SK1 土層

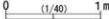
- 1 褐灰色 (10YR6/1) 細礫・中礫混じり 砂質土 焼土・炭化ブロックわずかに含む
- 2 褐灰褐色 (10YR5/1) 細礫・中礫混じり砂質土 焼土・炭化ブロック含む
- 3 褐灰色 (10YR5/1) 細礫・中礫混じり砂質土 焼土・炭化ブロック少し含む  
地山ブロック多く含む
- 4 褐灰色 (10YR5/1) 砂質土 焼土ブロック多く含む
- 5 褐灰色 (10YR5/1) 砂質土 焼土ブロック非常に多く含む
- 6 黄灰色 (2.5Y6/1 ~ 5/1) 砂質土 わずかに粘性
- 7 褐灰色 (10YR5/1) 細礫・粗砂混じり砂質土 焼土・炭化ブロック少し含む  
地山ブロック少し含む

SK3



SK4 土層

- 1 黄灰色 (2.5Y6/1 ~ 6/1) 砂質土 細礫含む マンガン弱く沈着
- 2 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘質土

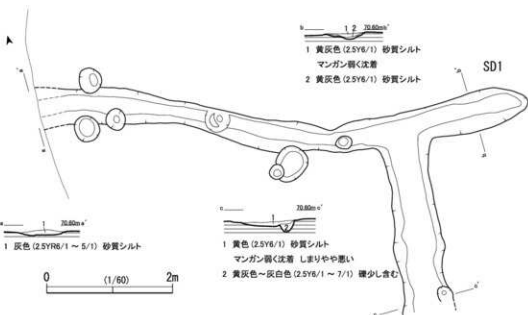


SP42



SP42 土層

- 1 灰白色 (10YR7/1) 細礫混じりシルト 褐灰色ブロック少し含む
- 2 明黄褐色 (10YR7/6) 細礫混じりシルト 褐灰色ブロック少し含む
- 3 にぶい黄褐色 (10YR7/2) ~ 褐灰色 (10YR6/2)  
粗砂混じり粘性シルト しまりや悪い
- 4 黄褐色 (10YR6/6) 粗砂混じりシルト わずかに粘性
- 5 にぶい黄褐色 (10YR7/4) 粗砂混じりシルト やや粘性
- 6-1 地山 明黄褐色 (10YR7/6) シルト しまり強い
- 6-2 地山 にぶい黄褐色 10YR7/4) 中礫 粗砂混じりシルト



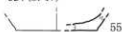
- 1 灰色 (2.5YR6/1 ~ 5/1) 砂質シルト



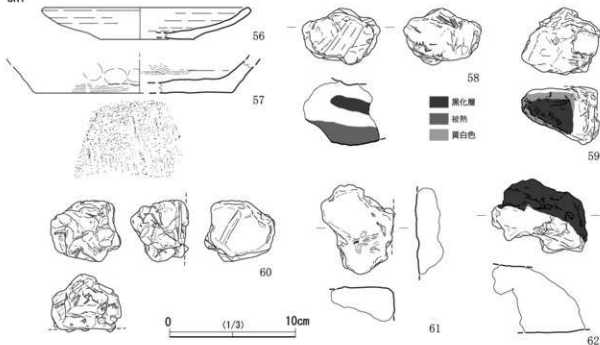
- 1 黄色 (2.5Y6/1) 砂質シルト  
マンガン弱く沈着 しまりや悪い
- 2 黄灰色~灰白色 (2.5Y6/1 ~ 7/1) 礫少し含む

第 76 図 5 地区 十坊・柱穴・濠室掘削面

SB1 (SP47)



SK1



第27図 5地区 出土遺物実測図(1)

### 谷状落ち込み

調査区東端にあり、南北に通る。検出規模は長さ19.2m以上、幅6.0m以上、深さ1.4mである。上層は褐色、中層は黄灰色、下層で灰色を中心に構成され、上～中層は砂質土、下層は粘質土になる。上～中層は近現代の人為埋土であり、遺物は主に下層から出土している。遺物は土師器、瓦質土器、陶磁器、不明鉄製品などが出土した。

### (2) 遺物

5地区からは13世紀後半～14世紀前半の土師器のほか、谷状落ち込みから青花を含む15世紀後半～16世紀の遺物が多く出土している。また、炉壁と考えられる焼土塊多数と鍛冶滓が出土しており、他の地区と様相がやや異なる。

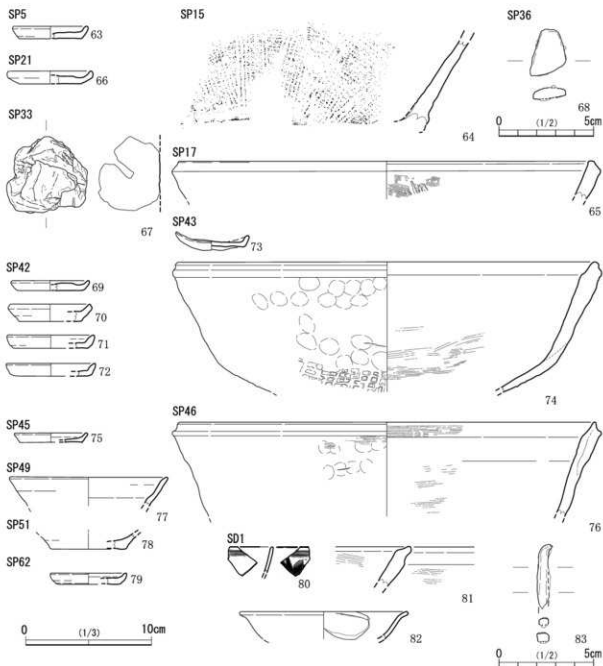
#### 掘立柱建物出土遺物(第27図)

55はSB1の構成柱穴SP47より出土した土師器杯である。深い器形であり、14世紀前半以降の所産であり、SB1の埋没時期の上限を示す。

#### 土坑出土遺物(第27図)

56～62はSK1より出土している。また、図示していないが、マツ科の炭化材が出土している(図版26)。56は土師器杯であり、内外面は比較的ていねいにナデ調整を施す。皿形化した器形であることから、15世紀の所産であると仮定するが、精緻な検証は出来ていない。57は瓦質土器捏鉢である。器表面の劣化が進行しているが、内面にハケ目が残る。底部内面はナデ調整を施す。15世紀前半は





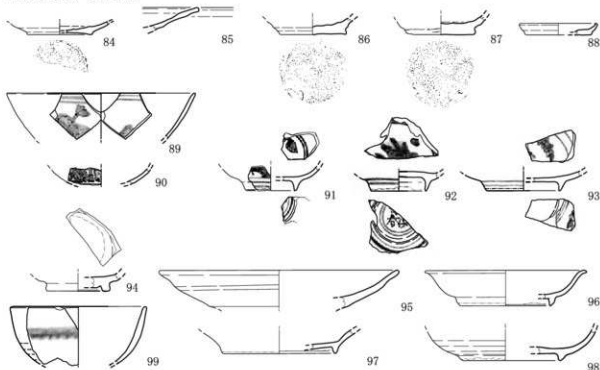
第28図 5地区 出土遺物実測図(2)

前の所産と考えられる。58～62は炉壁を構成していたと考えられる焼土塊であり、図示したものの以外にも多数出土している(図版21)。直線的な平坦面が残るものと、湾曲するものとが確認できるが、全体像を復元するには至っていない。いずれも混和材の繊維痕や棒状圧痕などが確認できる。以上の所見から、近辺に鑄造遺構が存在した可能性が高く、SK1出土遺物はその廃棄物ととらえることができる。廃棄時期は15世紀を前後するものと想定しているが、今後の追検証は必要である。

#### 柱穴出土遺物(第28図)

63はSP5出土の土師器皿で、13世紀後半～14世紀前半の所産である。64はSP15の瓦質土器播鉢である。内面のハケが明瞭に残り、卸目を密に入れていることから、15世紀後半～16世紀の所産である。65はSP17出土の瓦質土器播鉢で、口縁部をやや拡張している点から、15世紀の所産と考

谷状落ち込み 埋土下層



谷状落ち込み 埋土上層



第29図 5地区 出土遺物実測図(3)

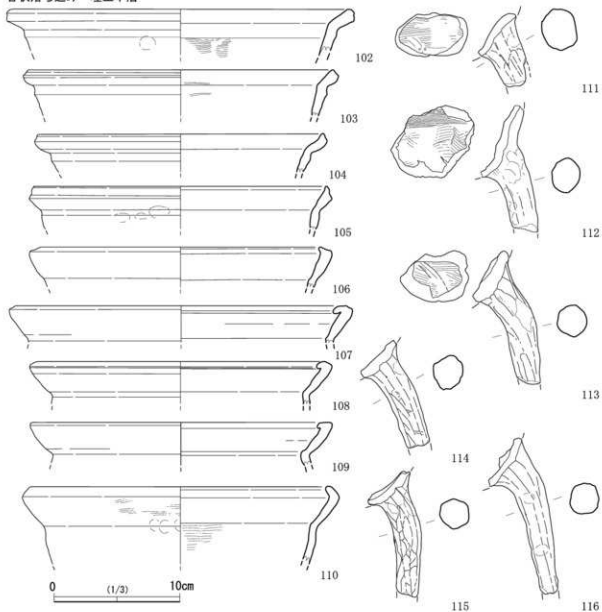
える。66はSP21出土の土師器皿で、13世紀後半～14世紀前半の所産である。67はSP33出土の焼土塊であり、板状の圧痕が明瞭に残る。SK1出土焼土塊と由来を同じくするものであり、15世紀を前後するものと仮定する。68はSP36出土の不明鉄片である。明瞭な刃部等は確認できず、裁断された残片の可能性がある。また、図示していないが、SP41からは鍛錬鍛治滓が出土している(第44図・図版22)。69～72はSP42出土の土師器皿であり、13世紀後半～14世紀前半の所産である。73・74はSP43から出土している。73は土師器皿で使用が困難なほど歪む。74は瓦質土器鍋であり、口縁部の形状から15世紀の所産と考える。75はSP45出土の土師器皿であり、14世紀以降の所産である。76はSP46出土の土師質土器鍋であり、退化気味の有段口縁をなす。14世紀の所産と考えられる。77はSP49出土の土師器杯であり、14世紀の所産である。78はSP51出土の土師器杯であり、14世紀の所産である。79はSP62出土の土師器皿であり、14世紀前半～中頃の所産と考えられる。

以上は、各柱穴の埋没時期の上限を示している。

溝出土遺物(第28図)

80～83はSD1より出土している。80は青花碗である。内外面に圓線を2条巡らしたうえ、外面に花卉文を描く。染付碗C群もしくはE群であり、15世紀末～16世紀前半の所産である。81は瓦質土器鍋であり、口縁部の形状から15世紀の所産と考えられる。82は白磁鉢であり、16世紀以降の所

谷状落ち込み 埋土下層



第30図 5地区 出土遺物実測図(4)

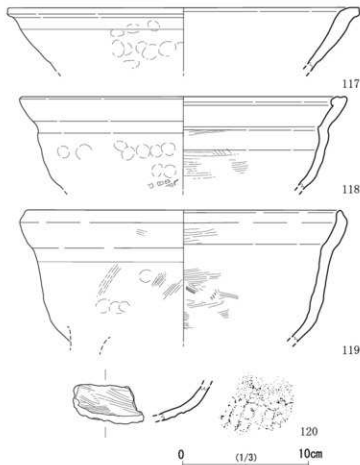
産である。83は鉄製品であり、鉄釘の可能性が考えられるが、頭部が明瞭ではない。これらはいずれも16世紀を主体とし、SD1の埋没時期の上限を示すものと判断している。

谷状落ち込み出土遺物(第29～34図)

谷状落ち込みからは多くの遺物が出土した。調査時には遺物が出土する埋土を上層、下層に細分して遺物を回収しているが、多くは埋土下層からの出土である。

84～87は土師器杯、88は土師器皿である。84・85は同一個体の可能性が高く、皿状に開く器形となる。内外面は比較的丁寧にナデ調整を施しているが、ロクロ目は消しきれていない。両者が同一個体なら、口径12.5cm、器高2.3cmほどに復元でき、器壁が薄型化していることから、15世紀後半～16世紀前半の所産と推定できる。86～88は14世紀前半と考えられ、谷状落ち込み出土遺物の中では古い様相になる。89～92は青花碗、93は青花皿であり、多くは景德鎮産と考えられる。花卉文

谷状落ち込み 埋土上層



第31図 5地区 出土遺物実測図(5)

が多く、芭蕉文(90)も含まれる。椀は染付椀E群もしくはC群、皿はB1群もしくはB2群の範疇であり、概ね16世紀代の所産である。94は龍泉窯青磁椀である。内面軸割ぎがなされ、畳付から外底面にかけては露胎する(図版23)。角高台であり、12世紀末～13世紀前半の所産である。95～97は中国産白磁皿である。96・97の畳付は露胎する。15世紀後半～16世紀の所産と考える。98は陶器皿であり、他国産の可能性が高いが、産地を特定できない。99は信楽焼陶器椀である。近世後半に下る可能性があり、混入の可能性も想定しておきたい。

100・101は埋土上層からの出土で、100が磁器染付椀、101が陶器椀である。100は端反り口縁であるが、九州近世陶磁編年Ⅱ-2期に類例が認められ、17世紀前半の所産かと考える。

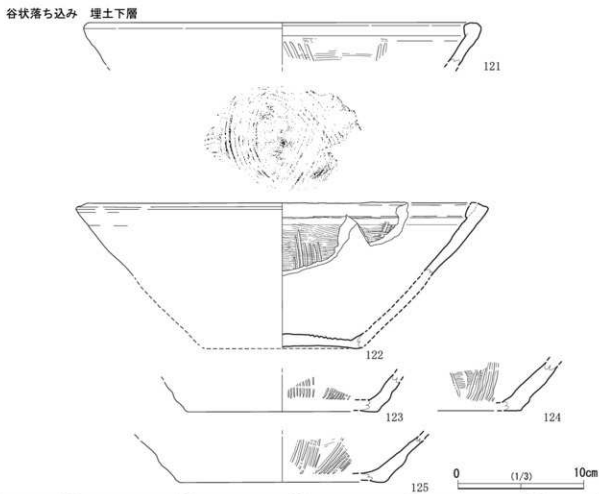
101は初期唐津焼陶器椀で17世紀以降の所産であり、両者とも埋土下層より新しい様相を備える。

102～116は埋土下層より出土した土師質土器鍋および瓦質土器足鍋・鍋である。岩崎編年Ⅱ型式(102)、Ⅲ古型式(103)、Ⅲ新型式(105)、Ⅳ型式(106・110)、ⅤB型式(107～109)が出土しており、14世紀後半～16世紀代のものが出土しているが、14世代のものが少なく、16世紀代のものが主体を占めている点で、上述の供膳具の様相と同じである。

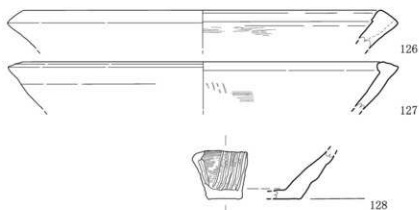
117～120は埋土上層より出土した土師質土器鍋および瓦質土器足鍋である。117は西長門型で、14世紀以降の所産である。118は岩崎編年ⅤB型式、119はⅢ新もしくはⅣ型式で15世紀後半～16世紀の所産であり、120もタタキが明瞭に残ることから15世紀以降のものである。これらは埋土下層と同時期のものであり、本来、埋土下層に属する可能性が高い。

121～128は瓦質土器播鉢で、121～125は埋土下層、127～128は埋土上層より出土している。埋土下層のものは口縁部の形状と、内面ハケの残存状況から、いずれも15世紀後半～16世紀の所産である。埋土上層から出土したものは、126が122と型式的にはほぼ同じかやや新しく、127は今宿東遺跡Ⅱ区の井戸より出土した17世紀前半の基準資料と同様、口縁端部を強く横ナデした凹凸が認められる。したがって、埋土下層よりやや新しい様相を備えており、同じく埋土上層より出土した100・101と同時期に位置づけられよう。

129～134は埋土下層より出土した瓦質土器湯釜である。このうち、134は径の大きい平底である



谷状落ち込み 埋土上層

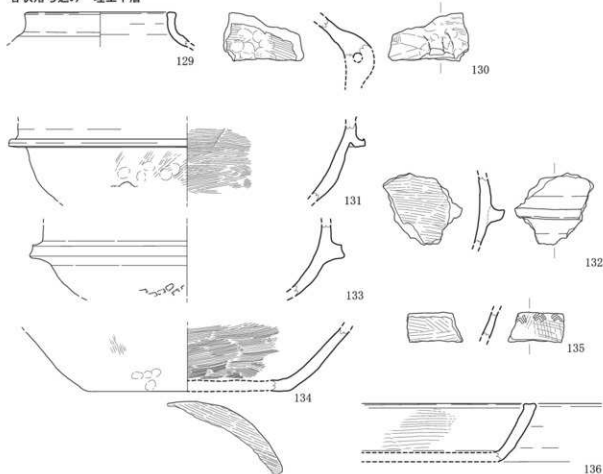


第32図 5地区 出土遺物実測図(6)

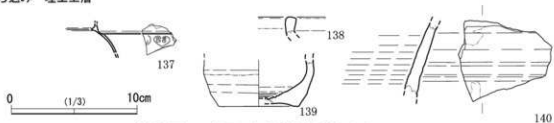
ことから、15世紀後半に位置づけられ、131・133が丸底に復元できることから、16世紀の所産と考えられる。135は火鉢、136は焙烙であり、16世紀の所産である。

137～140は埋土上層より出土した陶磁器である。137は陶器茶入と思われ、心葉形のスタンプ文を施した後、外面に朱泥を塗布している。他国産の可能性が高いが、産地を特定できない。138・139は同一個体の可能性のある唐津焼陶器で、茶入れかと思われる。九州近世陶磁器編年Ⅲ期に類例が認められ、17世紀の所産と考えられる。140は陶器甕であり、福建産の可能性が高い。これらは、産地・

谷状落ち込み 埋土下層



谷状落ち込み 埋土上層



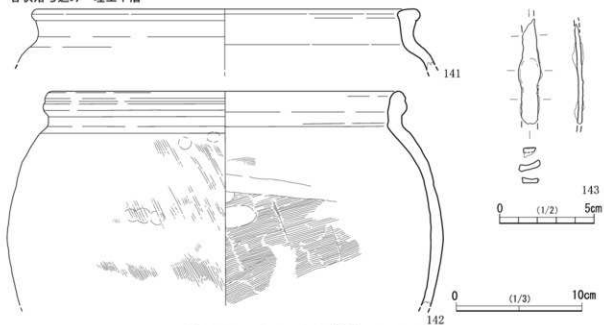
第33図 5地区 出土遺物実測図(7)

時期ともに不確定なものも多く、今後の追検証が必要であるが、少なくとも137～139は埋土下層よりも新しい時期の様相を備えるものである。

141・142は埋土下層より出土した瓦質土器甕もしくは火鉢であり、15世紀後半～16世紀の所産である。143は用途不明の鉄製品である。全体的に沿った形状をなし、中央部でへこむとともに幅広くなっている。

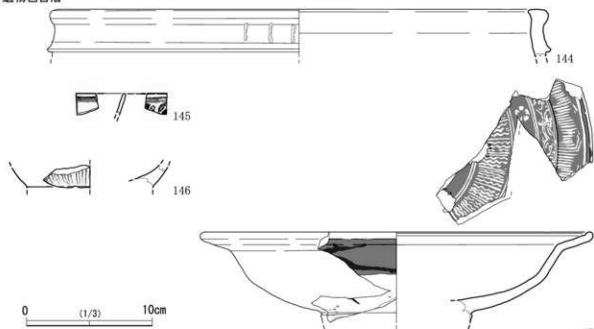
谷状落ち込みの出土遺物を総じてみると、埋土下層が15世紀後半～16世紀のものが主体を占め、埋土上層では17世紀のものが少量ではあるが主体となる。これらは、谷状落ち込みが埋没し始めた頃の時期を示していると考えられ、かつ、近辺の土地利用の主要時期を示しているものとみられる。

谷状落ち込み 埋土下層



第34図 5地区 出土遺物実測図(8)

遺物包含層



第35図 5地区 出土遺物実測図(9)

遺物包含層出土遺物(第35図)

144は瓦質土器火鉢であり、頸部に突線を巡らし、口縁部との間に縦刻み状のスタンプ文を巡らす。145は青花碗であり、内外面に圈線を2条巡らし、外面に花卉文を描く。146は青磁碗であり、線描き蓮弁文を施す。これらは、15世紀後半～16世紀の所産であり、谷状落ち込み埋土下層の出土遺物と同時期のものとなる。

147は三島手の陶器鉢である。内面の象嵌が形骸化しており、17世紀後半～18世紀の所産かと思われる。

## 6 6地区

### (1) 遺構

6地区は標高72.2～72.8mに位置する。基本土層は他地区と同様であるが、中層(第37図5-1～5-8)で氾濫堆積および水成堆積と考えられる層を確認した。いずれも灰～灰褐色で細～中礫が混じる。下層(第37図6-1～6-6)からは黒～灰褐色を基調とした包含層を確認し、細礫～中礫、炭化粒などが混じる。

遺構は柱穴65個、土坑6基、溝2条を検出した。以下、主な遺構を取り上げる。

#### 掘立柱建物

**SB1(第38図)** 調査区南西端に位置する。規模は1間(1.7m)×1間(2.0m)であり、調査区外に延びると推測される。方位はN18°Eである。構成柱穴であるSP12、SP13から土師器杯片が出土した。時期は中世である。

**SB2(第38図)** 調査区南西端に位置する。規模は2間のみで長さ3.3mある。方位はN66°Wである。構成柱穴であるSP18、SP26から土師器片が出土した。時期は中世である。

#### 土坑

**SK1(第39図)** 調査区西側中央付近に位置する。規模は長軸1.4m、短軸1.3m、深さ4～20cmの不整形土坑である。土師器杯がまとまって出土した。出土状況から廃棄されたと推測される。遺構の時期は13世紀後半～14世紀前半である。

**SK6(第39図)** 調査区東に位置する。平面形は円形である。規模は径68cm、深さ15cmである。土師器杯小片が出土した。遺構の時期、性格は不明である。

**SD1(第39図)** 調査区北側に位置し、東西に走行する。溝は西側で一度明瞭でなくなるが、調査区西壁にSD1の痕跡を確認する。規模は長さ10m以上、幅15～40cm、深さ1～16cmである。遺物は土師器小片、瓦質土器片が出土した。遺構の時期は、中世後半以降である。

**SD2(第39図)** 調査区南中央寄りに位置し南北に走行する。規模は長さ1.85m以上、幅51～60cm、深さ5～10cmである。遺物は土師器杯片が出土した。遺構の時期、性格は不明である。

### (2) 遺物

6地区からは主に遺物包含層から13世紀後半～14世紀前半の土器類が出土している。特に、SK1では土師器杯が一括廃棄された状況で検出でき、今回調査の時期を比定するうえでの基準資料となる。

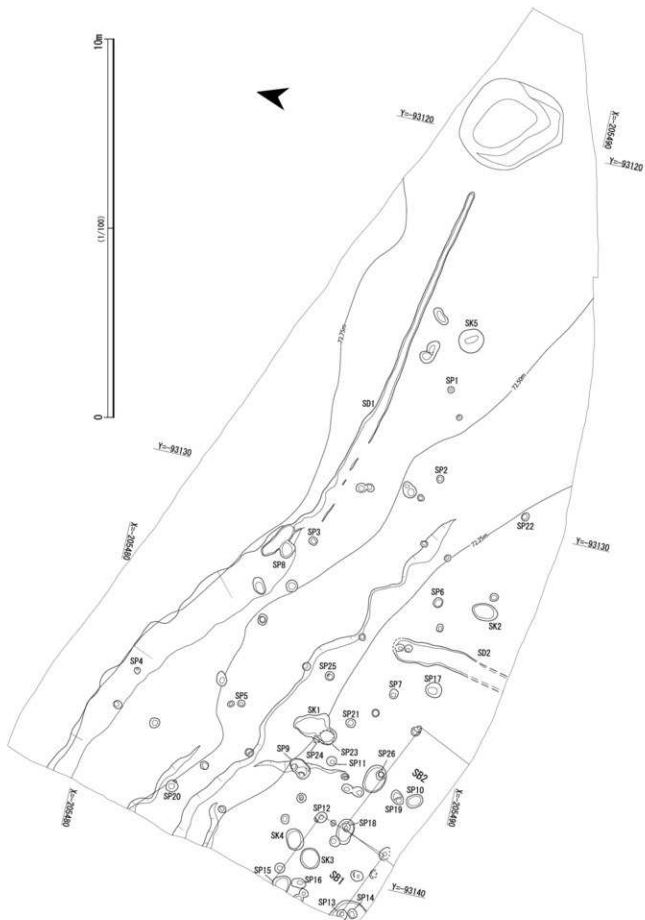
#### 掘立柱建物出土遺物(第40図)

148・149はSB1の構成柱穴SP13より出土した土師器杯である。深い器形のもの(148)と外に開く器形のもの(149)が出土している。両者は、後述するSK1出土のものと大差がなく、13世紀後半～14世紀前半の所産であり、SB1の埋没時期の上限を示す。

#### 土坑出土遺物(第40図)

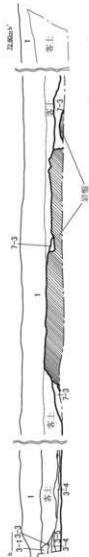
150～157はSK1より出土した土師器杯・皿である。杯は湾曲しながら外側に開くタイプ(150～153)、直線的に開き、深い器形のタイプ(154～155)に分けられる。また、前者は白色系で胎土に長石を含み、後者は赤褐色に近い橙色系で胎土に雲母を多量に含む点でも区別される。





第36図 6地区 遺構配置図

2.6km



6地区本・西型

- 1 現耕作土  
2 礫土  
3-1 旧耕作土 黄灰色(2.9)S/1 ~ 6/1) 中硬湿り砂質土  
3-2 旧耕作土 黄褐色(2.9)S/3) 中硬湿り砂質土  
3-3 旧耕作土 黄褐色(2.9)S/3 ~ 5/4) 中硬湿り砂質土  
3-4 旧耕作土 黄褐色(2.9)S/3 ~ 5/4) 砂質土 中硬少し含む  
3-5 旧耕作土 暗灰黄色(2.9)S/2 ~ 5/1) 中硬湿り砂質土  
3-6 旧耕作土 暗灰黄色(2.9)S/2 ~ 5/1) 中硬湿り砂質土 花崗土ブロック少し含む  
4-1 礫土 黄灰色(2.9)S/1) 細砂湿り砂質土 花崗土ブロック多く含む  
4-2 旧耕作土 灰色(9)S/1) 砂質土 花崗土ブロック少し含む  
4-3 旧耕作土 灰色(9)S/1) 細砂湿り砂質土  
4-4 礫土 花崗土ブロック  
5-1 冠層堆積? 暗灰色(2.9)S/1 ~ 5/1) 中硬湿り土 マンガンわずかに含む  
5-2 灰色(2.9)S/1 ~ 3/2) 細砂湿り砂質土 黄褐色土ブロック含む  
5-3 旧耕作土? 灰色(9)S/1) 細砂湿り砂質土  
5-4 暗灰色(2.9)S/1 ~ 5/1) 中硬湿り砂質土 花崗土ブロック含む マンガン少量  
5-5 冠層堆積? 暗灰色(2.9)S/1 ~ 3/4) 中硬・細砂湿り土 マンガン少量  
5-6 灰色(9)S/1) 細砂～砂質土 花崗土ブロック少し含む  
5-7 水成堆積 灰色(9)S/1 ~ 4/1) 細砂～砂質土  
5-8 水成堆積 灰色(9)S/1 ~ 4/1) 中硬湿り粗砂

Fe 沈着

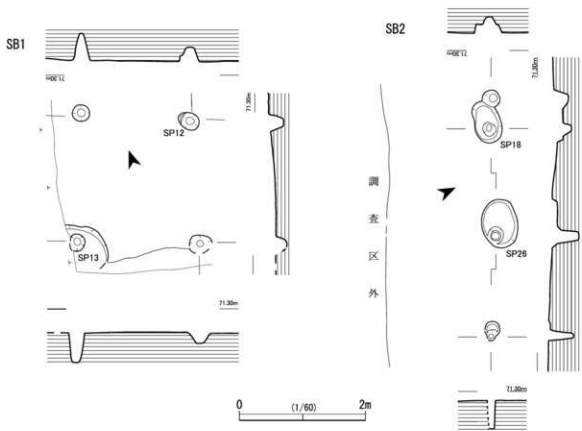
- 6-1 色成層・人為的堆土 黄灰色(2.9)S/1 ~ 4/1) 中硬・細砂湿り砂質土  
黄褐色土ブロック跡部に多く含む 土器片含む  
6-2 色成層・人為的堆土 暗灰色(5.9)S/1) 中硬・細砂湿り砂質土  
黄褐色土ブロック多く含む 灰化層・土器片含む  
6-3 色成層 黄褐色～暗灰色(10)R/1 ~ 4/1) 細砂湿り砂質土  
黄褐色土ブロック少し含む 灰化層・土器片含む  
6-4 色成層 暗灰色(2.9)S/1) 中硬・細砂湿り砂質土  
灰化層・土器片含む  
6-5 色成層 黄褐色～暗灰色(10)R/1 ~ 2.9)S/1) 細砂湿り砂質土  
灰化層・土器片含む  
6-6 色成層 暗灰色～暗灰色(10)R/1 ~ 2.9)S/1) 細砂湿り砂質土  
灰化層跡部に多く含む 土器片含む  
山に5-1) 暗色(7.9)S/3) 粘土  
山 黄褐色(10)R/4) 粘土  
山 明黄褐色(10)R/7/6) 花崗土 巨礫・大礫含む  
暗灰色(2.9)S/1) 細砂湿り砂質土  
黄褐色土ブロック(1 ~ 4/1) 砂質土 中硬粗粒  
黄褐色～暗灰色(10)R/1 ~ 4/1) 砂質土 中硬粗粒

0 (1/60) 1m

2.6km

第37図 6地区 壁土層断面図

0 (1/2000) 10m



第38図 6地区 掘立柱建物実測図

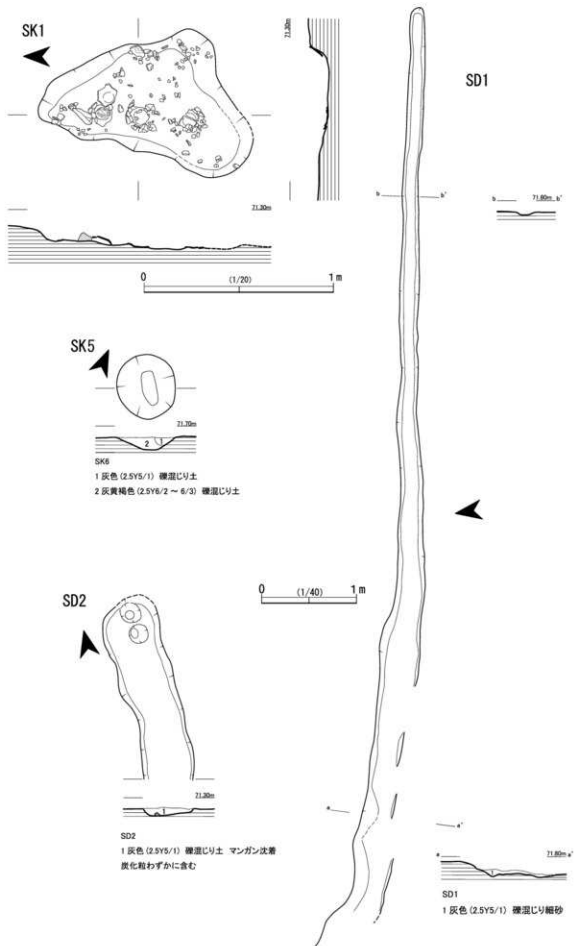
これまでの福年観では、前者が13世紀代、後者が14世紀代に位置づけられているものであるが、両者の破片が絡み合って、層位的な区別のしようがない状況で出土しており、一括廃棄された共存資料である。13世紀後半の基準資料である本郷遺跡SK15出土土器よりもやや新しい様相を備えることから、13世紀末～14世紀前半に位置づけることが可能である。

158はSK2より出土した土師器杯である。13世紀後半～14世紀前半の所産である。159はSK3より出土した土師器杯である。法量から14世紀後半～15世紀前半に比定できる。160・161はSK4より出土した土師器皿である。器形は13世紀代のものに近いが法量が縮小化している。13世紀末～14世紀前半の所産とみられる。

以上は、各土坑の埋没時期の上限を示している。

#### 柱穴出土遺物(第40図)

162はSP11より出土した硯である。断面形が垂直でなく、外に少し開く形状をなす。中世後半の所産と考えられる。163～165はSP14から出土した土師器杯である。163は底部と体部の接合面で剥離しており、その剥離面ではハケ目が観察できる。したがって、底部と体部を別作りで成形している。165も断面観察から同様の成形である可能性が高い。いずれも雲母を含み、赤褐色に近い橙色系の色調である。14世紀前半の所産と考える。166・167はSP15より出土した土師器杯である。14世紀前半～中頃の所産と考える。168・169はSP17より出土した土師器杯・皿である。13世紀末～14世紀前半の所産と考える。170・171はSP19より出土した土師器杯・皿である。13世紀末～14世紀前半の所産



第 39 図 6 地区 土坑・溝実測図

SB1 (SP13)



148



149

SK1



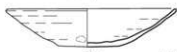
150



151



152



153



154



155



156



157

SK3



159

SP11



162

SP14



163

SK2



158

SK4



160



161



162



164

SP15



166

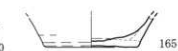
SP17



168



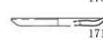
170



165



169

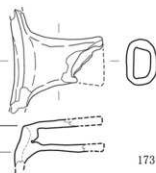


171



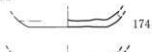
167

SD1



173

SD2



174

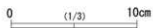


175

SP20

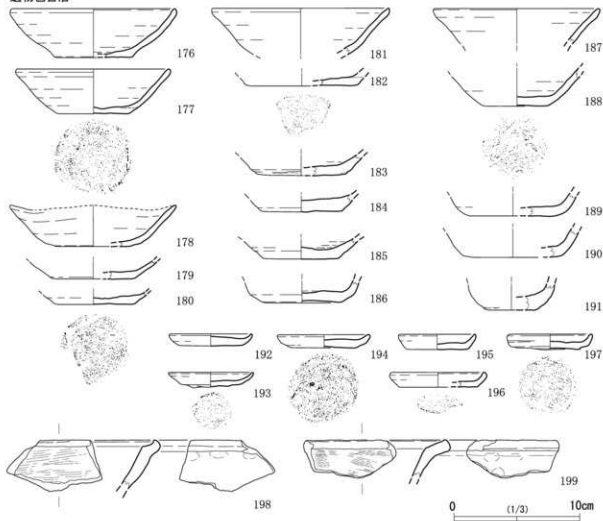


172



第40图 6地区 出土物实测图(1)

遺物包含層



第41図 6地区 出土遺物実測図(2)

と考える。172はSP20より出土した土師器杯である。13世紀後半～14世紀前半の所産である。

以上の出土遺物は、それぞれの柱穴の埋没時期の上限を示している。

溝出土遺物(第40図)

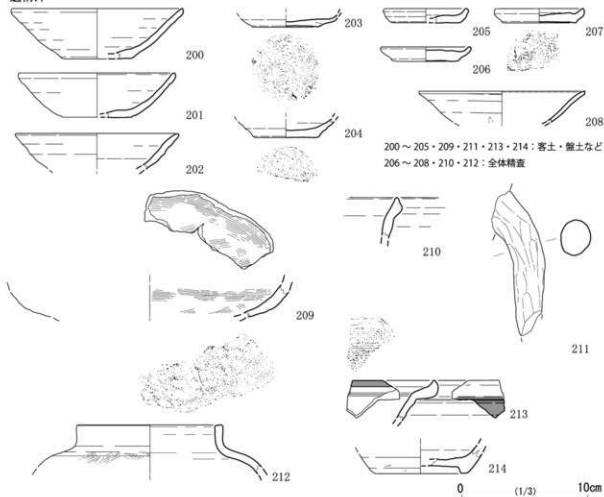
173はSD1より出土した瓦質土器鍋である。把手部の断面形が岩崎分類A1類(外面楕円形・内面長方形)である点では13世紀後半～15世紀前半に比定されるが、口縁部の断面形はⅢ新型式に近く、15世紀後半に比定できる。174・175はSD2より出土した土師器杯である。13世紀後半～14世紀前半の所産である。これらの出土遺物は溝の埋没時期の上限を示している。

遺物包含層出土遺物(第41図)

遺物包含層からは主に13世紀後半～14世紀前半の土師器が出土している。なお、SK1は調査時の便宜上、土坑名を付しているが、基本的に遺物包含層の一部であり、一括してとらえる必要がある。

176～190は土師器杯である。湾曲気味に開く器形のもの(176～181)、直線的に開くと思われるもの(187～190)がある。底部は薄手のもの(177～180・182)、厚手のもの(183～185)、体部まで均質的なもの(186・188～190)があり、湾曲気味に開く器形と薄手の底部の相関関係が高い。また、177・182は断面観察から底部と体部は別作りの可能性がある。SK1同様、13世紀末から14世紀前半

遺構外



第42図 6地区 出土遺物実測図(3)

の所産と考える。

土師器皿も湾曲気味に開く器形(192～194)、直線的に開く器形(195～197)がある。全体的に浅い器形であり、13世紀末～14世紀前半の所産と考える。

198・199は土師質土器鍋である。両者とも西長門型の可能性が高く、199は13世紀後半の所産と思われる。198は同時期かやや下るかもしれない。

これらは、遺物包含層の形成時期を示すとともに、6地区および近辺の居住城の存続時期を示す。

遺構外出土遺物(第42図)

土師器杯(200～204)、土師器皿(205～207)は客土・盤土からの出土であるが、本来、遺物包含層に属する可能性が高い。13世紀末～14世紀前半の所産である。208は白磁鉢であり、口縁部は口縁げである。大宰府分類IX類(14世紀)であり、これも本来遺物包含層に属する可能性が高い。

209～211は瓦質土器足鍋である。このうち、210は岩崎編年Ⅲ古もしくはⅢ新型式であり、15世紀中頃～後半の所産である。212は瓦質土器湯釜である。15世紀後半～16世紀の所産である。これらは本来、遺物包含層を切り込んで形成される柱穴の存続時期に関わるものと考えられ、かつ、中世後半と推定される硯が出土したSP11とも対応するものではないかと考える。

第2表 遺物観察表  
土器・陶磁器観察表

探区	No.	番区	遺物番号	種類	器種	口径 (cm)			胎土	地味	色調 (内) (内)	主文調飾 (内) (内)	備考
						口徑 (最大)	底径 (最大)	高さ (最大)					
8	19	1	SP1	瓦葺土器	圓鉢	-	-	(5.85)	黒 長石 石灰	やや真	茶色、灰黄褐色 にふいふ褐色	ハタ オキエ、ナヤ	5条層目
8	-	2	SD1 下層	土器器	杯	(14.0)	-	(2.2)	黒 長石	やや真	浅黄褐色 或黄褐色	同転ナヤ 同転ナヤ	
8	-	3	SD1 上面	土器器	杯	-	(6.0)	(0.8)	黒 長石	真	にふいふ褐色 にふいふ褐色、褐色	同転ナヤ 同転ナヤ	同転赤褐色 飯目目肌
8	19	4	SD1 下層	土器器	皿	7.0	6.0	1.0	黒 長石 石灰	やや真	褐色 褐色	同転ナヤ 同転ナヤ	飯目層減
8	19	5	SD1 下層	土器器	皿	8.9	5.9	0.8	黒 長石	やや真	褐色 褐色	同転ナヤ 同転ナヤ	同転赤褐色
8	19	6	SD1	青磁	碗	-	-	(5.0)	黒	真		同転ナヤ 同転ヘラケズウ	13c 前半～中盤
8	19	7	SD1	白磁	皿	(9.2)	-	(2.05)	黒	真		同転ナヤ 同転ヘラケズウ	
8	19	8	SD1	瓦葺土器	鍋	(35.0)	-	(5.0)	黒 長石 石灰	不真	浅黄褐色、にふいふ褐色 或黄褐色、黄灰色	ハタのち横ナヤ、横ナヤ ハタのち横ナヤ、横ナヤ	
8	-	9	SD1 上面	瓦葺土器	鍋	-	-	(2.2)	黒 長石	やや真	にふいふ褐色、浅黄褐色 にふいふ褐色	ハタのち横ナヤ ハタのち横ナヤ	
8	19	10	表探	陶器	甕	(19.0)	-	(3.6)	黒	真		同転ナヤ 同転ナヤ	常滑焼 13c 後
8	19	11	遺物検出	瓦葺土器	足跡 跡	-	-	(6.2)	黒 長石	不真	灰白色 灰白色	ナヤ オキエ、ナヤ、横ナヤナヤ	層合面で露輝
8	19	12	遺物検出	陶器	鉢	-	(9.5)	(4.0)	黒	真		同転ナヤ 同転ヘラケズウ	津田郷 赤灰陶 底面に亀裂
12	-	14	SK11	土器器	杯	-	(6.0)	(0.9)	黒 長石 赤母	やや真	褐色 褐色	同転ナヤ 同転ナヤ	同転赤褐色
12	-	15	SK19	土器器	杯	-	(6.6)	(1.15)	黒 長石 石灰	やや真	褐色 褐色	同転ナヤ 同転ナヤ	同転赤褐色
12	-	16	S P 21	土器器	皿	(6.0)	(5.0)	(0.75)	黒 長石 赤母	やや真	褐色 褐色	同転ナヤ 同転ナヤ	同転赤褐色
12	19	17	遺物検出	青磁	碗	-	-	(2.5)	黒	真		同転ナヤ 同転ヘラケズウ	11段内面に2条露輝 露輝目文字?
12	-	18	遺物検出	青磁	碗	-	-	(2.3)	黒	真		同転ナヤ 同転ヘラケズウ	露輝目文字 13c
12	19	2	客土	青磁	碗	-	(4.6)	(3.5)	黒	真		同転ナヤ 同転ヘラケズウ	露輝目文字 12c～13c 初
12	-	20	遺物検出	瓦葺土器	足跡 もしくは鍋	(28.0)	-	(4.8)	黒 長石	真	灰白色 灰白色	ハタのち横ナヤ ハタのち横ナヤ	外周露輝
12	-	21	遺物検出	瓦葺土器	圓鉢	(30.0)	-	(3.8)	黒 長石 石灰	真	褐色、黄褐色	ハタのち横ナヤ ハタのち横ナヤ、オキエ	
16	-	22	SK1	土器器	杯	-	(5.3)	(0.5)	黒 長石	真	褐色 褐色	同転ナヤ 同転ナヤ	同転赤褐色
16	-	23	SK2	土器器	皿	(7.8)	(5.9)	1.2	黒	真	暗灰色 暗灰色	同転ナヤ 同転ナヤ	同転赤褐色
16	20	24	SP1	瓦葺土器	圓鉢	(37.0)	(19.2)	11.3	黒 長石 石灰	真	灰白色 灰白色、灰色	ハタ オキエ、ハタのち横ナヤ	5条層目 飯目目肌
16	-	25	SP13	土器器	杯	-	(7.0)	(1.3)	黒 長石	やや真	褐色 褐色	同転ナヤ 同転ナヤ	同転赤褐色 飯目目肌?
16	20	26	SP9	土器器	杯	(12.4)	(6.0)	4.0	黒 長石 赤母	真	褐色 褐色	同転ナヤ (ロク目目肌) 同転ナヤ	同転赤褐色 飯目内面にクワ目露輝
16	20	27	SP3	土器器	杯	-	(6.0)	(2.0)	黒 長石	やや真	褐色 褐色	同転ナヤ 同転ナヤ	同転赤褐色
16	-	28	SP3	土器器	杯	-	(5.7)	(1.3)	黒 長石 赤母	やや真	褐色 褐色	同転ナヤ 同転ナヤ	同転赤褐色
16	20	29	SP3	土器器	杯	-	(5.8)	(1.2)	黒 長石 赤母	真	褐色 褐色	同転ナヤ 同転ナヤ	同転赤褐色
16	-	30	SP3	土器器	杯	-	(7.0)	(0.95)	黒 長石 赤母	真	にふいふ黄褐色 にふいふ黄褐色	同転ナヤ 同転ナヤ	同転赤褐色
16	-	31	SP3	土器器	杯	-	(6.6)	(1.75)	黒 長石 赤母	やや真	にふいふ黄褐色	同転ナヤ 同転ナヤ	同転赤褐色
16	-	32	SP3	土器器	杯	(14.4)	-	(3.4)	黒	やや真	浅黄褐色 或黄褐色	同転ナヤ 同転ナヤ	
16	20	33	SP3	土器器	杯	-	(6.6)	(2.05)	黒 長石 石灰	真	褐色 褐色	同転ナヤ 同転ナヤ	同転赤褐色
16	20	34	SP3	土器器	杯	-	(8.0)	(2.95)	黒 長石 赤母	真	褐色 褐色	同転ナヤ 同転ナヤ	同転赤褐色
16	20	35	SP3	土器器	皿	8.8	3.5	0.9	黒 長石	真	浅黄褐色 或黄褐色	同転ナヤ 同転ナヤ	同転赤褐色
16	-	36	SP3	土器器	皿	(7.0)	(5.8)	0.9	黒 長石 赤母	真	褐色 褐色	同転ナヤ、ナヤ 同転ナヤ	同転赤褐色
16	20	37	SP3	土器器	皿	(8.2)	(5.8)	2.3	黒 長石 赤母	やや真	褐色、暗灰色 褐色、暗灰色	同転ナヤ 同転ナヤ	同転赤褐色 露輝付着
16	-	38	SP42	土器器	杯	-	(6.0)	(1.0)	黒 長石	やや真	灰黄色 灰黄色	同転ナヤ 同転ナヤ	同転赤褐色
16	20	39	SP44	土器器	杯	-	(5.4)	(1.05)	黒	やや真	褐色 褐色	同転ナヤ 同転ナヤ	同転赤褐色 露輝付着
16	-	40	SP45	土器器	杯	-	(7.3)	(1.3)	黒 長石	やや真	褐色 褐色	同転ナヤ 同転ナヤ	同転赤褐色
17	-	41	遺物検出	土器器	杯	-	(6.6)	(1.0)	黒 長石 赤母	やや真	褐色 褐色	同転ナヤ 同転ナヤ	同転赤褐色
17	-	42	遺物検出	土器器	皿	(7.4)	(5.8)	1.1	黒 長石	やや真	褐色 褐色	同転ナヤ 同転ナヤ	同転赤褐色



棟号	階数	No	部位	造作番号	種別	設備	法量 (m)			粘土	焼成	色調 (内)	主成分 (内)	備考	
							口径 (mm)	径径 (mm)	器具 (mm)						
17	20	43	3	造作機出	土質土部	溝	-	-	(46)	概	中々具	浅黄褐色 浅黄褐色	ハタのりナテ、横ナテ ハタのりナテ		
17	20	44	3	露土	土質土部	溝	(20)	-	(44)	概	長石 石英	浅黄褐色 灰黄色	ハタのりナテ ハタのりナテ		
17	20	45	3	露土	土質土部	溝	(20)	-	(60)	露	長石 石英	棕色、明褐色、灰黄褐色	オヤエ、ハテ、横ナテ オヤエ、ハテ、横ナテ	外周露行着	
17	-	46	3	露土	土質土部	溝	(20)	-	(53)	概	長石 石英	にぶい黄褐色 灰黄色、棕色	ハタのりナテ ハタのりナテ		
17	20	47	3	造作機出	土質土部	溝	-	(195)	(54)	露	中々具	にぶい黄褐色 灰黄褐色	オヤエのりナテ オヤエのりナテ	外周露行着	
17	20	48	3	表保	陶器	行平調整	-	-	(20)	露	具		同転ナテ 同転ヘラナテ	面ノ黄褐色	
17	20	49	3	露土	陶器	板	-	(17)	(17)	露	具		同転ナテ 同転ヘラナテ	黄褐色 白比露土、外周露行着	
22	20	30	4	SK3	土部器	杯	-	(48)	1.1	露	長石 石英	浅黄褐色、にぶい黄褐色 高褐色、浅黄褐色	同転ナテ 同転ナテ	同転赤寄り	
22	-	52	4	SD1 土	土部器	杯	-	(70)	1.05	露	長石 石英	棕色	ハタのりナテ?	同転ナテ	同転赤寄り?
22	20	53	4	SD1 南	土部器	皿	(60)	(40)	0.9	露	長石	棕色	同転ナテ 同転ナテ	同転赤寄り	
22	20	54	4	SD1 南	瓦質土部	不明	-	-	(22)	概	長石	灰白色 灰白色	横ナテ 横ナテ	断面に黄褐色 風化露土に近い	
27	-	55	5	SD1 (SP47)	土部器	杯	-	(64)	(09)	露	並母 長石	棕色 黄褐色	同転ナテ 同転ナテ	同転赤寄り	
27	21	56	5	SK1	土部器	杯	(166)	(74)	2.5	露	長石 石英	浅黄褐色、にぶい黄褐色 浅黄褐色、灰黄褐色	同転ナテ 同転ナテ	同転赤寄り	
27	21	57	5	SK1	瓦質土部	調整	-	(148)	(21)	概	中々具	灰白色 灰白色	横ナテ、ハテ、オヤエ オヤエのりナテ	板目片成	
28	21	63	5	SP5	土部器	皿	(60)	(50)	(10)	概	並母多量 長石	棕色 棕色	同転ナテ 同転ナテ	同転赤寄り	
28	21	64	5	SP15	瓦質土部	調整	-	(74)		露	不具	灰色、暗灰色、灰白色 灰色、暗灰色、灰白色	ハテ ナテ	8条目片	
28	-	65	5	SP17	瓦質土部	調整	(240)	-	(30)	露	中々具	灰白色、灰色 灰白色、灰色	ハテ、横ナテ ナテ、横ナテ		
28	22	66	5	SP21	土部器	皿	(66)	(49)	1.0	露	具	棕色	同転ナテ 同転ナテ	同転赤寄り	
28	-	69	5	SP42	土部器	皿	(62)	(52)	0.8	露	並母	棕色 棕色	同転ナテ 同転ナテ	底面露成	
28	22	70	5	SP42	土部器	皿	(56)	(50)	1.4	露	並母	棕色 棕色	同転ナテ 同転ナテ	同転赤寄り	
28	22	71	5	SP42	土部器	皿	(70)	(60)	1.05	露	並母	棕色 棕色	同転ナテ 同転ナテ	同転赤寄り	
28	22	72	5	SP42	土部器	皿	(70)	(60)	1.0	露	長石 並母	棕色 棕色	同転ナテ 同転ナテ	底面露成	
28	22	73	5	SP43	土部器	皿	5.9	4.8	1.5	露	長石 並母	棕色 棕色	同転ナテ 同転ナテ	同転赤寄り 釜口大	
28	22	74	5	SP43	瓦質土部	溝	(240)	-	(50)	露	長石 石英	灰白色、灰色 にぶい黄褐色	ハタのりナテ 横ナテ	外周露行着	
28	-	75	5	SP45	土部器	皿	(58)	(50)	0.75	露	中々具	棕色	同転ナテ 同転ナテ	同転赤寄り	
28	22	76	5	SP46	土質土部	溝	(240)	-	(74)	露	長石 石英	浅黄褐色、にぶい黄褐色 浅黄褐色、にぶい黄褐色	ハタのりナテ、横ナテ ハタのりナテ、横ナテ		
28	-	77	5	SP49	土部器	杯	(126)	-	(23)	露	並母 長石	棕色 棕色	同転ナテ 同転ナテ		
28	-	78	5	SP51	土部器	杯	-	(60)	(09)	露	並母 長石	棕色 棕色	同転ナテ 同転ナテ	同転赤寄り	
28	-	79	5	SP52	土部器	皿	(60)	(50)	1.9	露	並母 長石	棕色 棕色	同転ナテ 同転ナテ		
28	23	80	5	SD1 東側	青花	板	-	-	(23)	露	具		同転ナテ 同転ヘラナテ	花卉文	
28	-	81	5	SD1 東側	瓦質土部	溝	-	-	(21)	露	不具	灰色、灰白色 灰色、灰黄褐色	ハタのりナテ、横ナテ ハタのりナテ、横ナテ		
28	-	82	5	SD1 西側	白磁	鉢	(132)	-	(32)	露	具		同転ナテ 同転ヘラナテ	16c	
29	22	84	5	香取湯ちよみ 焼土下層	土部器	杯	-	(50)	(09)	露	石英	浅黄褐色 浅黄褐色	同転ナテ 同転ナテ	同転赤寄り	
29	-	85	5	香取湯ちよみ 焼土下層	土部器	杯	-	-	(32)	露	石英	浅黄褐色、棕色	同転ナテ 同転ナテ	84と同じ個体の 可能性高い	
29	-	86	5	香取湯ちよみ 焼土下層	土部器	杯	-	(52)	(13)	露	具	にぶい黄褐色 浅黄褐色	同転ナテ 同転ナテ	同転赤寄り	
29	-	87	5	香取湯ちよみ 焼土下層	土部器	杯	-	(54)	(12)	露	長石	棕色	同転ナテ 同転ナテ	同転赤寄り	
29	-	88	5	香取湯ちよみ 焼土下層	土部器	皿	(61)	(52)	1.9	露	具	灰白色 灰白色	同転ナテ 同転ナテ		
29	23	89	5	香取湯ちよみ 焼土下層	青花	板	(148)	-	(36)	露	具		同転ナテ 同転ヘラナテ	中国産 16c	
29	23	90	5	香取湯ちよみ 焼土下層	青花	板	-	-	(13)	露	具		同転ナテ 同転ヘラナテ	伊勢焼 色無文	
29	23	91	5	香取湯ちよみ 焼土下層	青花	板	-	(17)	(19)	露	具		同転ナテ 同転ヘラナテ	伊勢焼 16c、16d	
29	23	92	5	香取湯ちよみ 焼土下層	青花	板	-	(44)	(13)	露	具		同転ナテ 同転ヘラナテ	江戸瓦 16c、16d、16e、16f、16g、16h	
29	23	93	5	香取湯ちよみ 焼土下層	青花	皿	-	(37)	(16)	露	具		同転ナテ 同転ヘラナテ	伊勢焼 16c	

種別	No.	地区	遺構番号	種類	図様	法長 (cm)			筋土	構成	色調 (P) (%)	主な調剤 (P) (%)	備考	
						口径 (標準)	底径 (標準)	器高 (標準)						
29	23	94	5	母状流ち込み 埋土層	青磁	筒	-	(49)	(13)	密	灰	同転ナデ 同転ヘラケズワ	亀島遺跡 内面輪郭径 15c-13c 前	
29	23	95	5	母状流ち込み 埋土層	白磁	皿	(18.8)	-	(30)	密	灰	同転ナデ 同転ヘラケズワ、同転ナデ	辻東部中 15c-16c	
29	23	96	5	母状流ち込み 埋土層	白磁	皿	(12.5)	(7.2)	2.8	密	灰	同転ナデ 同転ヘラケズワ	中国産 15c-16c	
29	-	97	5	母状流ち込み 埋土層	白磁	皿	-	(8.0)	(1.9)	密	灰	同転ナデ 同転ヘラケズワ	中国産 15c-16c	
29	23	98	5	母状流ち込み 埋土層	陶器	皿	-	(7.7)	(2.5)	密	灰	同転ナデ 同転ヘラケズワ	産地不明	
29	23	99	5	母状流ち込み 埋土層	陶器	筒	(3.0)	-	(4.6)	密	灰	同転ナデ 同転ヘラケズワ	関東後人の可能性あり	
29	23	100	5	母状流ち込み 埋土層	磁器 染付	筒	(11.25)	-	(2.75)	密	灰	同転ナデ 同転ヘラケズワ	17c 前半	
29	23	101	5	母状流ち込み 埋土層	陶器	筒	-	-	(5.0)	密	灰	同転ナデ 同転ヘラケズワ	初期後洋	
30	-	102	5	母状流ち込み 埋土層	土師質土器	筒	(27.0)	-	(3.5)	密	石英 灰	灰白色 灰白色	ハタ、磁ナデ 磁ナデ、オヤエ	
30	24	103	5	母状流ち込み 埋土層	瓦質土器	鍋	(25.0)	-	(3.6)	密	灰	灰色 紫色	ハタのちナデ、磁ナデ ハタのちナデ、磁ナデ	外面保存
30	24	104	5	母状流ち込み 埋土層	瓦質土器	鍋	(23.2)	-	(3.0)	密	灰 石英	灰黄色 灰黄色	ハタのち磁ナデ 磁ナデ	
30	24	105	5	母状流ち込み 埋土層	瓦質土器	鍋もしくは 足罎	(24.0)	-	(3.4)	粗	灰	灰白色 灰白色	ハタのち磁ナデ オヤエ、磁ナデ	
30	-	106	5	母状流ち込み 埋土層	瓦質土器	鍋もしくは 足罎	(24.0)	-	(3.1)	密	灰	灰色 灰色	磁ナデ 磁ナデ	
30	24	107	5	母状流ち込み 埋土層	瓦質土器	足罎 もしくは 足罎	(27.2)	-	(3.0)	粗	灰	灰色 暗灰色	磁ナデ 磁ナデ	
30	-	108	5	母状流ち込み 埋土層	瓦質土器	足罎	(24.0)	-	(2.4)	密	灰	灰色 灰色	磁ナデ 磁ナデ	
30	24	109	5	母状流ち込み 埋土層	瓦質土器	足罎	(24.0)	-	(3.1)	密 灰石	不具	暗灰色 灰色	磁ナデ 磁ナデ	
30	-	110	5	母状流ち込み 埋土層	瓦質土器	足罎 もしくは 足罎	(25.0)	-	(6.1)	密	灰	暗灰色、灰色 暗灰色、黄褐色	ハタのち磁ナデ ハタのち磁ナデ	
30	-	111	5	母状流ち込み 埋土層	瓦質土器	足罎 脚座	-	-	(3.8)	粗 灰石 石英	不具	灰色 灰白色	ハタ ナデ、オヤエ	
30	24	112	5	母状流ち込み 埋土層	瓦質土器	足罎 脚座	-	-	(10.0)	密	灰	灰色 灰黄色	ハタ、ナデ ハタのちナデ、オヤエ	
30	24	113	5	母状流ち込み 埋土層	瓦質土器	足罎 脚座	-	-	(10.5)	粗	中々具	灰白色 灰白色	ハタ、オヤエ ナデ、オヤエ ナデ	
30	24	114	5	母状流ち込み 埋土層	瓦質土器	足罎 脚座	-	-	(8.5)	密 灰石	不具	暗灰色、灰色 暗灰色、灰色	オヤエ、ナデ	
30	24	115	5	母状流ち込み 埋土層	瓦質土器	足罎 脚座	-	-	(9.9)	密	不具	暗灰色 灰白色	ハタのちナデ ハタのちナデ	外面保存
30	24	116	5	母状流ち込み 埋土層	瓦質土器	足罎 脚座	-	-	(12.2)	密 灰石	不具	灰白色、暗灰色 灰白色、暗灰色	オヤエのちナデ	
31	24	117	5	母状流ち込み 埋土層	土師質土器	鍋	(28.0)	-	(5.0)	密 灰石	不具	黄褐色 灰黄色	ナデ、磁ナデ オヤエのちナデ、磁ナデ	外面保存
31	24	118	5	母状流ち込み 埋土層	瓦質土器	足罎	(24.0)	-	(7.3)	密 灰石	不具	灰白色、灰色 灰色	ハタのちナデ、磁ナデ オヤエのちナデ、磁ナデ	外面保存
31	24	119	5	母状流ち込み 埋土層	瓦質土器	足罎	(26.0)	-	(10.4)	密	不具	灰色 灰色	ハタ、磁ナデ ハタ、磁ナデ	オヤエ、ナデ、オヤエ
31	-	120	5	母状流ち込み 埋土層	瓦質土器	足罎	-	-	(2.7)	密 灰石 石英	不具	灰色、暗灰色 暗灰色、灰白色	ハタ オヤエ、ナデ、磁ナデ	
32	25	121	5	母状流ち込み 埋土層	瓦質土器	圓鉢	(30.0)	-	(3.3)	密	不具	橙色、灰黄色 橙色、灰黄色	ハタのち磁ナデ 磁ナデ	煤、鉄熱灰
32	25	122	5	母状流ち込み 埋土層	瓦質土器	圓鉢	(31.0)	122	(11.5)	粗	不具	灰色 灰色	ハタ、磁ナデ ナデ	7条目 敷目付
32	-	123	5	母状流ち込み 埋土層	瓦質土器	圓鉢	-	-	(5.0)	(2.3)	密	灰 灰白色、灰色 灰白色、灰色	不明 ナデ	9条目
32	-	124	5	母状流ち込み 埋土層	瓦質土器	圓鉢	-	-	(2.5)	密	不具	灰色 灰白色	ハタ ナデ	7条目
32	-	125	5	母状流ち込み 埋土層	瓦質土器	圓鉢	-	-	(3.4)	密 灰石	中々具	灰白色、灰色 灰白色、灰色	ハタ ナデ	7条目
32	-	126	5	母状流ち込み 埋土層	瓦質土器	圓鉢	(31.0)	-	(3.1)	密 灰石 石英	不具	灰黄色 灰黄色	ハタのち磁ナデ 磁ナデ	
32	25	127	5	母状流ち込み 埋土層	瓦質土器	圓鉢	(31.0)	-	(3.6)	密 灰石 石英	中々具	灰白色、灰色 灰白色、灰色	磁ナデ ハタ、磁ナデ	
32	25	128	5	母状流ち込み 埋土層	瓦質土器	圓鉢	-	-	(3.4)	密 灰石	不具	灰色 灰色	ハタ ナデ	
33	25	129	5	母状流ち込み 埋土層	瓦質土器	高梁	(11.7)	-	(2.8)	密	中々具	灰色 灰色	磁ナデ 磁ナデ	
33	25	130	5	母状流ち込み 埋土層	瓦質土器	湯 かき 足子部	-	-	(3.4)	粗	中々具	灰白色 不明(保存者)	ハタのちオヤエ ハタのちオヤエ、ナデ	内面が遺溝により集
33	-	131	5	母状流ち込み 埋土層	瓦質土器	高梁	-	-	(6.2)	密	不具	灰色 灰黄色	ハタ オヤエ、ハタ、ナデ	
33	25	132	5	母状流ち込み 埋土層	土師質土器	湯 かき	-	-	(5.2)	粗	中々具	灰黄色 暗灰色	ハタ 磁ナデ	瓦質の可能性あり
33	25	133	5	母状流ち込み 埋土層	瓦質土器	高梁	-	-	(5.6)	密 灰石 石英	不具	灰色 暗灰色、紫褐色	ハタのちナデ 磁ナデ、磁ナデ	外面保存
33	25	134	5	母状流ち込み 埋土層	瓦質土器	高梁	-	-	(3.0)	粗	不具	灰色 灰色	ハタ ハタのちナデ	煤面調査
33	26	135	5	母状流ち込み 埋土層	瓦質土器	穴縁もしくは 丸入れ	-	-	(2.0)	密	中々具	灰黄色 灰黄色	ハタ ハタのちナデ	型押し文

棟号	階数	No.	用途	構造番号	種別	設備	法量 (m)			粘土	焼成	色調 (P)	主調色 (P)	備考		
							口径	径深	器具							
							口径	径深	器具							
							(mm)	(mm)	(種別)							
33	26	136	5	谷沢赤土系 埋土下層	瓦質土層	基入?	-	-	(46)	■	赤灰色 黄灰色	ハク ナデ				
33	26	137	5	谷沢赤土系 包含層	陶器	急傾	-	-	(195)	■	■	■	同軸ナデ 同軸ヘラナデ	産地不明 17~18c		
33	-	138	5	谷沢赤土系 埋土上層	陶器	基入?	-	-	(15)	■	■	■	同軸ナデ 同軸ナデ	139と同一産地か?		
33	26	139	5	谷沢赤土系 埋土上層	陶器	基入?	-	6.3	(365)	■	■	■	同軸ナデ 同軸ナデ	産地 17c		
33	26	140	5	谷沢赤土系 埋土上層	陶器	■	-	-	(52)	■	■	■	同軸ナデ 同軸ナデ	産地不明?		
34	26	141	5	谷沢赤土系 埋土下層	瓦質土層	美しくは 火砕	(200)	-	(44)	■	■	不具	■	同軸ナデ 横ナデ		
34	26	142	5	谷沢赤土系 埋土下層	瓦質土層	■	(276)	-	(170)	■	■	■	■	同軸ナデ 同軸ナデ	ハクのうちナデ、横ナデ ハクのうちナデ、横ナデ	
35	26	144	5	下層	瓦質土層	火砕	(266)	-	(28)	■	■	■	■	同軸ナデ 同軸ナデ	ハクのうちナデ ハクのうちナデ	
35	-	145	5	遺物包含層 下層	首瓦	■	-	-	(17)	■	■	■	■	同軸ナデ 同軸ナデ	16c	
35	26	146	5	遺物包含層 下層	首瓦	■	-	-	(18)	■	■	■	■	同軸ナデ 同軸ナデ	産地不明 15c末~16c	
35	26	147	5	上層	陶器	■	(350)	-	(72)	■	■	■	■	同軸ナデ 同軸ヘラナデ	三島手 内面装束、砂目	
40	-	148	6	SD1 (SP13)	土層部	■	-	95	(20)	■	赤々点	■	■	同軸ナデ 同軸ナデ	同軸赤塗り	
40	-	149	6	SD1 (SP13)	土層部	■	-	92	(09)	■	赤々点	■	■	同軸ナデ 同軸ナデ	同軸赤塗り	
40	27	150	6	SK1 No.1	土層部	■	(146)	5.4	36	■	長石	赤々点	■	同軸ナデ 同軸ナデ	同軸赤塗り No.4の破片と整合	
40	27	151	6	SK1 No.5	土層部	■	(141)	5.2	38	■	長石	赤々点	■	同軸ナデ 同軸ナデ	同軸赤塗り No.10の破片と整合	
40	27	152	6	SK1 No.3	土層部	■	142	5.3	37	■	長石	赤々点	■	同軸ナデ 同軸ナデ	同軸赤塗り 内面にロウロ目やややく	
40	27	153	6	SK1 No.4	土層部	■	(133)	4.8	31	■	長石少量	赤々点	■	同軸ナデ 同軸ナデ	同軸赤塗り 2色の粘土混ぜ合わせ	
40	27	154	6	SK1 No.2	土層部	■	(126)	4.9	36	■	長石少量	赤々点	■	同軸ナデ 同軸ナデ	同軸赤塗り	
40	27	155	6	SK1 No.2	土層部	■	(129)	5.4	41	■	雲母	■	■	同軸ナデ 同軸ナデ	同軸赤塗り ロウロ目やや やく No.3と整合	
40	28	156	6	SK1 No.12	土層部	■	-	(52)	1.5	■	長石少量	赤々点	■	同軸ナデ 同軸ナデ	同軸赤塗り	
40	28	157	6	SK1 No.13	土層部	■	94	(45)	1.2	■	長石少量	赤々点	■	同軸ナデ 同軸ナデ	産地不明	
40	28	158	6	SK2	土層部	■	-	47	(08)	■	赤々点	■	■	同軸ナデ 同軸ナデ	産地不明	
40	28	159	6	SK3	土層部	■	11.6	6.3	36	■	赤々点	■	■	同軸ナデ 同軸ナデ	同軸赤塗り	
40	28	160	6	SK4	土層部	■	9.6	(44)	1.35	■	長石少量	赤々点	■	同軸ナデ 同軸ナデ	同軸赤塗り	
40	-	161	6	SK4	土層部	■	9.6	(36)	1.1	■	赤々点	■	■	同軸ナデ 同軸ナデ	産地不明	
40	28	163	6	SP14	土層部	■	-	77	(09)	■	雲母	■	■	同軸ナデ 同軸ナデ	ハクのうちナデ 未調査	
40	28	164	6	SP14	土層部	■	(137)	(7.1)	37	■	雲母	■	■	同軸ナデ 同軸ナデ	同軸赤塗り	
40	28	165	6	SP14	土層部	■	-	(72)	(25)	■	雲母	■	■	同軸ナデ 同軸ナデ	同軸赤塗り	
40	28	166	6	SP15	土層部	■	-	(68)	(23)	■	赤々点	■	■	同軸ナデ 同軸ナデ	同軸赤塗り 縦目肌	
40	28	167	6	SP15	土層部	■	-	(79)	(18)	■	長石少量	赤々点	■	同軸ナデ 同軸ナデ	産地不明	
40	28	168	6	SP17	土層部	■	-	(72)	(26)	■	雲母	■	■	同軸ナデ 同軸ナデ	同軸赤塗り	
40	-	169	6	SP17	土層部	■	(7.4)	9.5	1.05	■	雲母少量	赤々点	■	同軸ナデ 同軸ナデ	同軸赤塗り	
40	28	170	6	SP19	土層部	■	-	(32)	1.1	■	長石少量	赤々点	■	同軸ナデ 同軸ナデ	同軸赤塗り	
40	-	171	6	SP19	土層部	■	(72)	9.0	0.6	■	長石	赤々点	■	同軸ナデ 同軸ナデ	産地不明	
40	28	172	6	SP20	土層部	■	-	(68)	(09)	■	雲母	■	■	同軸ナデ 同軸ナデ	未調査 未調査	
40	28	173	6	SD1	瓦質土層	■	37	-	■	■	■	■	■	同軸ナデ 同軸ナデ	産地不明	
40	-	174	6	SD2	土層部	■	-	63	(13)	■	雲母	赤々点	■	■	同軸ナデ 同軸ナデ	未調査 未調査
40	28	175	6	SD2	土層部	■	-	99	(13)	■	赤々点	■	■	同軸ナデ 同軸ナデ	同軸赤塗り	
41	29	176	6	遺物包含層	土層部	■	128	(6.25)	4.9	■	赤々点	■	■	同軸ナデ 同軸ナデ	同軸赤塗り	
41	29	177	6	遺物包含層	土層部	■	(121)	5.7	35	■	赤々点	■	■	同軸ナデ 同軸ナデ	同軸赤塗り	
41	29	178	6	遺物包含層	土層部	■	(130)	(3.95)	3.3	■	赤々点	■	■	同軸ナデ 同軸ナデ	同軸赤塗り	
41	-	179	6	遺物包含層	土層部	■	-	97	(1.4)	■	不具	■	■	同軸ナデ 同軸ナデ	同軸赤塗り	

種別	No.	地区	遺構番号	種類	器機	法長 (cm)			粘土	構成	色調 (P) (%)	主な調色 (P) (%)	備考			
						口径	底径	器高								
						(最大径)	(最大径)	(最大径)								
41	29	180	6	遺物包含層	土器器	杯	-	5.6	(10)6	青	やや真	灰黄褐色 灰黄褐色	同転ナア 同転ナア	同転赤塗り		
41	29	181	6	遺物包含層	土器器	杯	(14.0)	-	(3.7)	青	やや真	棕色 棕色	同転ナア 同転ナア			
41	-	182	6	遺物包含層	土器器	杯	-	(8.7)3	(1.0)	黄 墨母	真	にぶい棕色 にぶい棕色	同転ナア 同転ナア	同転赤塗り		
41	29	183	6	遺物包含層	土器器	杯	-	(7.2)	(1.6)5	青 灰石少量	やや真	棕色 同転ナア	同転ナア 同転ナア	同転赤塗り		
41	-	184	6	遺物包含層	土器器	杯	-	(6.0)	(1.2)5	黄 墨母	真	棕色 棕色	同転ナア 同転ナア	同転赤塗り		
41	29	185	6	遺物包含層	土器器	杯	-	(6.2)5	(2.6)	青	やや真	棕色 にぶい棕色	同転ナア 同転ナア	同転赤塗り		
41	29	186	6	遺物包含層	土器器	杯	-	(6.2)5	(1.7)	黄 灰石少量	真	棕色 棕色	同転ナア 同転ナア	同転赤塗り		
41	-	187	6	遺物包含層	土器器	杯	(13.0)5	-	2.8	青	やや真	にぶい棕色 にぶい棕色	同転ナア 同転ナア			
41	29	188	6	遺物包含層	土器器	杯	-	3.2	(3.0)	青	やや真	棕色 棕色	同転ナア 同転ナア	同転赤塗り		
41	29	189	6	遺物包含層	土器器	杯	-	(7.0)	(1.8)	黄 墨母	真	棕色 棕色	同転ナア 同転ナア			
41	-	190	6	遺物包含層 No.2	土器器	杯	-	(7.5)	(3.2)	黄 灰石少量	やや真	棕色 棕色	同転ナア 同転ナア			
41	-	191	6	遺物包含層	土器器	鉢?	-	(3.9)	(2.1)	青	やや真	棕色 棕色	未調査 (ロウソ目)			
41	29	192	6	遺物包含層 No.4	土器器	皿	(6.4)	5.0	0.9	青	やや真	棕色 棕色	同転ナア 同転ナア	同転赤塗り		
41	29	193	6	遺物包含層	土器器	皿	6.6	4.7	1.2	黄 灰石	やや真	にぶい棕色 にぶい棕色	同転ナア 同転ナア	同転赤塗り		
41	29	194	6	遺物包含層 No.1	土器器	皿	(7.2)	3.3	1.0	黄 灰石・石英	真	にぶい棕色 にぶい棕色	同転ナア 同転ナア	同転赤塗り		
41	29	195	6	遺物包含層 No.3	土器器	皿	(6.0)	(4.7)	1.2	黄 灰石少量	やや真	棕色 棕色	同転ナア 同転ナア	同転赤塗り		
41	-	196	6	遺物包含層	土器器	皿	(7.3)	(6.2)	1.2	青	やや真	棕色 棕色	同転ナア 同転ナア	同転赤塗り		
41	29	197	6	遺物包含層	土器器	皿	6.6	6.2	1.25	青	真	浅黄褐色 浅黄褐色	同転ナア 同転ナア	同転赤塗り		
41	29	198	6	遺物包含層	土器器土器	罎	-	-	(3.8)5	青	真	棕色 にぶい棕色	ハケのちナア、横ナア ハケのちナア、横ナア			
41	-	199	6	遺物包含層	土器器土器	罎	-	-	(2.0)	青	真	にぶい棕色 にぶい棕色	ハケ、横ナア ハケのちナア			
42	30	200	6	竈土	土器器	杯	(13.3)	(3.8)5	4.0	黄 灰石少量	やや真	棕色 棕色	同転ナア 同転ナア	同転赤塗り		
42	30	201	6	竈土	土器器	杯	(12.5)	(3.4)	-	黄 灰石	やや真	棕色 棕色	同転ナア 同転ナア	同転赤塗り		
42	30	202	6	竈土	土器器	杯	(12.0)	-	(2.8)	黄 墨母 灰石	真	棕色 棕色	同転ナア 同転ナア			
42	30	203	6	竈土	土器器	杯	-	(3.3)	(0.9)	黄 灰石 墨母	真	浅黄褐色 浅黄褐色	同転ナア 同転ナア	同転赤塗り		
42	-	204	6	竈土	土器器	杯	-	(3.4)	(1.4)	黄 灰石	真	棕色 棕色	同転ナア 同転ナア	同転赤塗り		
42	30	205	6	竈切	土器器	皿	(6.8)	(3.4)	1.35	黄 墨母 灰石	やや真	棕色 棕色	同転ナア 同転ナア	同転赤塗り		
42	-	206	6	全体調査	土器器	皿	(7.2)	(3.2)	1.15	黄 灰石少量	やや真	棕色 棕色	同転ナア、ナアか 同転ナア	同転赤塗り		
42	30	207	6	全体調査	土器器	皿	(7.2)	(3.7)	1.15	黄 灰石	真	棕色 棕色	同転ナア、ハケのちナア?	同転赤塗り 同転ナア	同転赤塗り 底部内面にハケ目?	
42	30	208	6	遺構跡出	白磁	鉢	(13.2)	-	(2.5)	青	真	棕色 棕色	同転ナア 同転ナア	1.5厚 - 14c 煎手		
42	30	209	6	竈土	瓦質土器	足罎	-	-	(3.8)5	(2.6)	黄	やや真	浅黄褐色 陶灰	ハケ ナア、横ナア		
42	30	210	6	全体調査	瓦質土器	足罎	-	-	(2.2)	黄	真	灰色 灰色	横ナア		15c中～後	
42	30	211	6	竈土	瓦質土器	足罎	-	-	(10)5	青	真	灰黄褐色 灰黄褐色	ナア ナア		接合面に粘土目 確認	
42	30	212	6	全体調査	瓦質土器	高釜	(11.2)5	-	(3.8)5	青	やや真	灰白色 灰白色	横ナア ハケのち横ナア			
42	30	213	6	竈切	陶器	鉢	-	-	(3.2)	青	真	棕色 棕色	同転ナア 同転ナア		三島子 穴両象嵌	
42	30	214	6	竈切	陶器	壺	-	-	(7.4)	(2.2)	青	真	棕色 棕色	同転ナア 同転ヘラケズウ		貫付に砂 割り出し灰石

### 土製品観察表

挿図 図版	No	地区	遺構番号	種別	器種	法量 (cm)			色調	備考	
						長さ	幅	厚さ			
27	21	58	5	SK1	焼土塊	44	61	4.9	橙色	繊維圧痕多数	
27	21	59	5	SK1	焼土塊	53	60	4.55	浅黄橙色	炭熱中に本体から剥落?	
27	21	60	5	SK1	焼土塊	4.85	55	4.6	表面: 橙色 断面: にぶい黄橙色	平坦面に棒状圧痕 繊維圧痕多数	
27	21	61	5	SK1	焼土塊	6.85	58	2.6	明黄褐色	平坦面2面残存 繊維圧痕	
27	21	62	5	SK1	焼土塊	5.9	75	5.2	にぶい黄橙色		
28	21	67	5	SP33	焼土塊	6.0	63	4.85	にぶい黄橙色	平坦面残存 繊維圧痕、板状の圧痕	
-	21	216	5	SK1	焼土塊	3.7	36	2.9	橙色	棒状圧痕	
-	21	217	5	SK1	焼土塊	5.0	42	3.45	橙色、灰白色	棒状圧痕	
-	21	218	5	SK1	焼土塊	3.1	296	1.9	橙色	棒状圧痕	
-	21	219	5	SK1	焼土塊	7.35	54	4.35	灰白色	棒状圧痕	
-	21	220	5	SK1	焼土塊	6.6	37	3.05	にぶい黄橙色	平坦面残存	
-	21	221	5	SK1	焼土塊	5.70	43	2.8	褐灰色、灰白色	棒状圧痕	
-	21	224	5	SP26	焼土塊	4.35	38	2.5	にぶい橙色、灰白色	繊維圧痕	
-	21	225	5	SP33	焼土塊	7.0	46	4.15	橙色、にぶい黄橙色	平坦面残存 繊維圧痕多数	
-	21	226	5	SD1 東側	焼土塊	3.35	34	2.95	にぶい黄橙色		
-	21	227	5	SD1 東側	焼土塊	3.8	34	2.6	黒褐色、にぶい黄橙色	棒状圧痕	
43	-	239	1	SD1	焼土塊	加埋	5.1	32	3.8	黒褐色、にぶい黄橙色	分析番号 KOK-1
43	-	240	1	表塚	焼土塊	加埋	7.7	51	4.7	黒褐色、にぶい黄橙色	分析番号 KOK-2

### 鉄製品観察表

挿図 図版	No	地区	遺構番号	種別	器種	法量 (cm)			重量 g	備考		
						長さ	幅	厚さ				
22	20	51	4	SP1	鉄製品	鉄釘	(3.40)	0.7	0.80	5.3		
28	22	68	5	SP36	鉄製品	不明	(2.45)	1.7	0.55	4.5		
28	22	83	5	SD1 西側	鉄製品	鉄釘?	(3.35)	0.6	0.45	2.0		
35	26	143	5	谷状落ち込み	埋土下層	鉄製品	不明	(5.5)	1.2	2.0	8.7	
44	-	215	4	SK3	椀形鍔治洋		3.7	2.9	1.7	16.3	分析番号 KOK-3	
44	22	229	5	SP41	鍔治洋		11.4	8.8	7.0	480.8	分析番号 KOK-4	

### 石製品観察表

挿図 図版	No	地区	遺構番号	器種	法量 (cm)			重量 g	石材	備考	
					長さ	幅	厚さ				
8	19	13	1	表面採集	割片	10.25	9.1	3.15	301.5	安山岩	風化顯著
40	28	162	6	SP11	鹿 硯頭部	(1.55)	4.95	2.0	13.6	赤色頁岩	中世後半か
-	21	222	5	SK1	焼石	7.85	4.7	2.15			焼成破裂片
-	21	223	5	SK1	焼石	13.25	7.25	1.5			焼成破裂片
-	21	228	5	SD1 東側	焼石	8.6	3.65	0.7			焼成破裂片

### 炭化物観察表

挿図 図版	No	地区	遺構番号	種別	器種	法量 (cm)			色調	備考
						長さ	幅	厚さ		
-	26	230	6	SK1	炭 (アカガシ)					分析番号 PLD-27042
-	-	231	5	SK1	炭 (マツ)					分析番号 PLD-27041
-	-	232	3	SP39	炭 (散孔材)					分析番号 PLD-27040

## IV 自然科学分析

### 1 江の河原遺跡出土炉壁・鉄滓の分析調査

日鉄住金テクノロジー（株）

八幡事業所 TACセンター

大澤正己・鈴木瑞穂

#### (1) いきさつ

江の河原遺跡は山口県美祿市に所在する。調査地区からは中世の炉壁・鉄滓などの鉄関連遺物が出土している。当遺跡周辺での生産の様相を検討する目的から調査を実施する運びとなった。

#### (2) 調査方法

##### ① 供試材

第3表に示す。出土炉壁・鉄滓計4点の調査を行った。

##### ② 調査項目

###### 肉眼観察

分析調査を実施する遺物の外観の特徴など、調査前の観察所見を記載した。

###### 顕微鏡組織

鉄滓の鉄物組成や金属部の組織観察、非金属介在物の調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の $3\mu\text{m}$ と $1\mu\text{m}$ で鏡面研磨した。観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真撮影を行った。

###### EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査

日本電子(株)製 JXA-8800RL (波長分散型5チャンネル) にて含有元素の定性・定量分析を実施した。定量分析は試料電流 $20 \times 10^{-8}$ アンペア、ビーム径 $3\mu\text{m}$ 、補正法はZAFに従った。

反射電子像 (COMP) は、調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される箇所ほど明るく、軽い元素で構成される箇所ほど暗い色調で示される。これを利用して、各相の組成の違いを確認後、定量分析を実施している。また元素の分布状態を把握するため、反射電子像に加え、特性X線像の撮影も適宜行った。

###### 化学組成分析

出土遺物の性状を調査するため、構成成分の定量分析を実施した。

全鉄分 (Total Fe)、金属鉄 (Metallic Fe)、酸化第一鉄 (FeO) : 容量法。

炭素 (C)、硫黄 (S) : 燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化硅素 ( $\text{SiO}_2$ )、酸化アルミニウム ( $\text{Al}_2\text{O}_3$ )、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化カリウム ( $\text{K}_2\text{O}$ )、酸化ナトリウム ( $\text{Na}_2\text{O}$ )、酸化マンガン (MnO)、二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ )、酸化クロム ( $\text{Cr}_2\text{O}_3$ )、五酸化燐 ( $\text{P}_2\text{O}_5$ )、バナジウム (V)、銅 (Cu)、二酸化ジルコニウム ( $\text{ZrO}_2$ ) : ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 法 : 誘導結合プラズマ発光分光分析。

### (3) 調査結果

#### ① KOK-1: 炉壁

肉眼観察：ごく小形の炉壁 (38.0g) 破片である。炉材の厚みと被熱の状態から、鑄造用の溶解炉の可能性が考えられる。内面は強い熱影響を受けており、黒色ガラス質化している。ガラス質滓部分には弱い着磁性があり、コバルト色の付着物が点在する。炉壁は淡橙色の粘土質で、砂や有機質の混和物が確認される。

顕微鏡組織：第43図①～③に示す。内面表層の黒色ガラス質滓部分の拡大である。素地部分は完全にガラス質化しているが、炉材粘土中に混和された微細な石英・長石類などの砂粒が点在する。また微細な明白色結晶はヘマタイト (Hematite:  $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )、灰褐色多角形結晶はマグネタイト (Magnetite:  $\text{Fe}_3\text{O}_4$ ) と推定される。

化学組成分析：第4表に示す。全鉄分 (Total Fe) 5.73% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.05%、酸化第1鉄 (FeO) 1.58%、酸化第2鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) 6.37% の割合であった。ガラス質滓中の鉄酸化物を反映したものと考えられる。一方銅 (Cu) は < 0.01% と非常に低値であった。またアルミナ ( $\text{Al}_2\text{O}_3$ ) は 14.68% と低めで、耐火性にはやや不利な成分系といえる。

当炉壁の内面表層部では溶着金属はみられなかったが、微細な鉄酸化物が多数晶出していた。これらは鑄造原料 (鑄鉄) の溶解の際、一部が酸化雰囲気中に晒されて浮化したものと推察される。上述した炉材の形状を勘案しても、鉄鑄物の鑄造に用いた溶解炉の破片の可能性が高いと考えられる。

#### ② KOK-2: 炉壁

肉眼観察：小形で厚手の炉壁 (126.3g) 破片である。炉壁 (KOK-1) と同様、炉材の厚みと被熱の状態から、鑄造用の溶解炉の可能性が考えられる。内面は強い熱影響を受けており黒色ガラス質化している。ガラス質滓の着磁性はやや強く、黒灰色の付着物が点在する。炉壁は淡橙色で粘土質である。また砂や有機質の混和物、木炭が少量確認される。

顕微鏡組織：第43図④～⑥に示す。内面表層のガラス質滓部分の拡大である。やはり素地部分は完全にガラス質化しているが、微細な石英・長石類などの砂粒が点在する。また表層に凝集して晶出す微細な明白色結晶はヘマタイト、その内側の灰褐色多角形結晶はマグネタイトと推定される。

EPMA 調査：第45図①に内面表層部の反射電子像 (COMP) を示す。微細な明白色結晶と灰褐色結晶は反射電子像では明瞭な色調差はなく、特性 X 線像をみると鉄 (Fe)、酸素 (O) に反応がある。定量分析値は前者が 78.8% FeO - 3.1%  $\text{Al}_2\text{O}_3$  (分析点6)、後者は 81.4% FeO - 3.7%  $\text{Al}_2\text{O}_3$  (分析点7)、78.6% FeO - 5.3%  $\text{Al}_2\text{O}_3$  - 1.9% MgO (分析点8) であった。アルミナ ( $\text{Al}_2\text{O}_3$ ) などを少量含むが、前者はヘマタイト (Hematite:  $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )、後者はマグネタイト (Magnetite:  $\text{Fe}_3\text{O}_4$ ) と推定される。また素地部分の定量分析値は 67.4%  $\text{SiO}_2$  - 10.8%  $\text{Al}_2\text{O}_3$  - 2.1% CaO - 4.1%  $\text{K}_2\text{O}$  - 1.8%  $\text{Na}_2\text{O}$  - 6.0% FeO (分析点9) であった。非晶質珪酸塩である。

化学組成分析：第4表に示す。全鉄分 (Total Fe) 3.92% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は 0.07%、酸化第1鉄 (FeO) が 0.72%、酸化第2鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) 4.70% の割合であった。一方銅 (Cu) は 0.01% と低値である。またアルミナ ( $\text{Al}_2\text{O}_3$ ) は 15.14% とやや低めで、耐火性には若干不利な成分系といえる。

当炉壁のガラス質滓表層でも鉄酸化物の晶出が確認された。炉壁 (KOK-1) と同様、鉄鑄物の鑄

造に用いられた溶解炉の炉壁片と考えられる。また胎土部分の組成も近似する。

#### ③KOK-3：椀形鍛冶滓

肉眼観察：ごく小形で薄手の椀形鍛冶滓(16.3g)破片で、側面2面は破面である。上面表層には、白色の砂粒を含む黒色ガラス質滓が部分的に付着する。羽口先端の溶融物と推測される。滓部は灰褐色で着磁性がある。気孔は少なく緻密である。

顕微鏡組織：第44図①～③に示す。滓中の微細な明白色粒は金属鉄、粒状・不定形の青灰色部は錆化鉄である。また全体に淡灰色柱状結晶ファヤライト(Fayalite:  $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ )が晶出する。

EPMA調査：第45図②に滓部の反射電子像(COMP)を示す。中央の微小明白色部は特性X線像では鉄(FeO)にのみ強い反応がある。定量分析値は99.5%Fe(分析点1)であった。金属鉄(Metallic Fe)である。周囲の淡灰色柱状結晶は特性X線像では鉄(Fe)、珪素(Si)、酸素(O)に反応がある。定量分析値は63.1%FeO-1.7%MgO-30.5%SiO<sub>2</sub>(分析点10)であった。ファヤライト(Fayalite:  $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ )で、微量マグネシア(MgO)を固溶する。また素地部分の定量分析値は39.2%SiO<sub>2</sub>-16.2%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-12.7%CaO-2.3%K<sub>2</sub>O-1.5%Na<sub>2</sub>O-22.2%FeO(分析点12)であった。非晶質珪酸塩で、鉄分(FeO)が高い割合を占める。

化学組成分析：第4表に示す。全鉄分(Total Fe)40.38%に対して、金属鉄(Metallic Fe)0.07%、酸化第1鉄(FeO)43.62%、酸化第2鉄(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)9.16%の割合であった。造滓成分(SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O)は42.91%と高値であるが、このうち塩基性成分(CaO+MgO)の割合は3.21%と低めである。また主に製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱)に含まれる二酸化チタン(TiO<sub>2</sub>)は0.21%、バナジウム(V)が0.01%と低値であった。酸化マンガン(MnO)も0.15%、銅(Cu)は<0.01%と低値である。

当鉄滓は主に鉄酸化物(FeO)と炉材粘土(SiO<sub>2</sub>主成分)溶融物からなり、鉄素材を熱間で鍛打加工した際に生じた鍛錬鍛冶滓と推定される。

#### ④KOK-4：鍛冶滓

肉眼観察：大形で厚手の鍛冶滓(480.8g)破片である。表面には黄褐色の土砂が付着する。滓の地の色調は暗灰色で着磁性がある。気孔は少なく、緻密で重量感のある滓である。また部分的に茶褐色の錆化鉄部が点在するが、特殊金属探知器での反応はない。

顕微鏡組織：第44図④～⑥に示す。滓中には微細な白色樹枝状結晶ウスタイト(Wustite: FeO)、淡灰色柱状結晶ファヤライト(Fayalite:  $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ )が晶出する。また滓中の不定形青灰色部は錆化鉄である。金属組織痕跡は不明瞭で、炭素含有率の推定等は困難な状態であった。

化学組成分析：第4表に示す。全鉄分(Total Fe)47.50%に対して、金属鉄(Metallic Fe)は0.12%、酸化第1鉄(FeO)8.76%、酸化第2鉄(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)58.01%の割合であった。造滓成分(SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O)は19.66%と低めで、塩基性成分(CaO+MgO)の割合も0.53%と低い。主に製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱)に含まれる二酸化チタン(TiO<sub>2</sub>)は0.10%、バナジウム(V)が0.01%と低値であった。また酸化マンガン(MnO)は0.08%、銅(Cu)も0.01%と低値である。

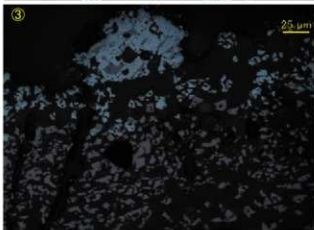
当鉄滓も椀形鍛冶滓(KOK-3)と同様、主に鉄酸化物(FeO)と炉材粘土(SiO<sub>2</sub>主成分)の溶融物からなり、鉄素材を熱間で鍛打加工した際に生じた鍛錬鍛冶滓と推定される。





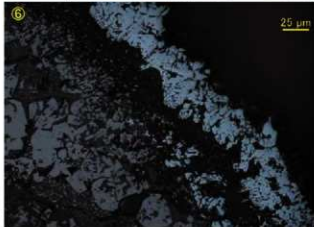
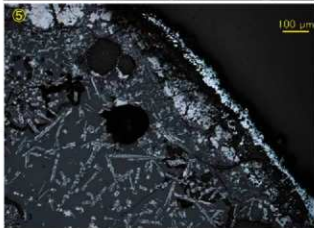
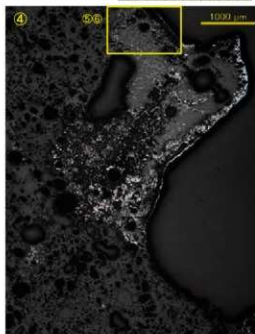
**KOK-1 炉壁**

- ①内面側：ガラス質滓、石英・長石類多数混在、②  
③表層部拡大、ヘマタイト・マグネシウム晶出



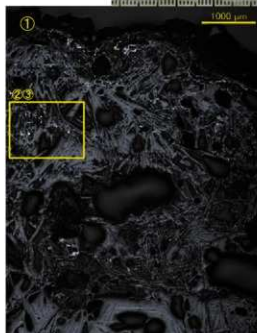
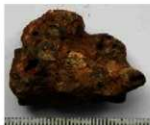
**KOK-2 炉壁**

- ④内面側：ガラス質滓、石英・長石類混在、⑤⑥表  
層部拡大、ヘマタイト・マグネシウム晶出



第 43 図 炉壁の顕微鏡組織

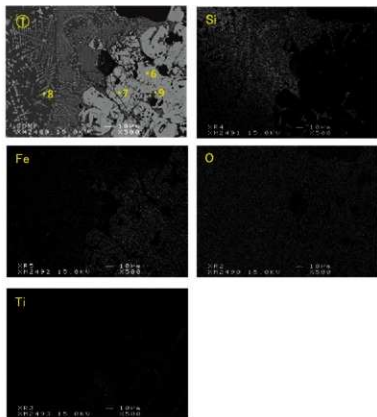
KOK-3  
 梘形鍛冶滓  
 ①～③滓部、フェライト、微  
 小金属鉄粒・錆化鉄散在



KOK-4  
 鍛冶滓  
 ④～⑥滓部、ウスタイト・フ  
 ヤライト、錆化鉄散在

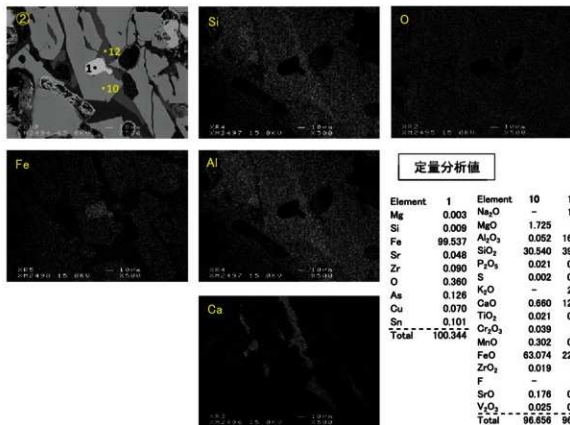


第 44 図 鍛冶滓の顕微鏡組織



定量分析値				
Element	6	7	8	9
Na <sub>2</sub> O	-	-	-	1.807
MgO	0.007	0.874	1.922	0.054
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	3.105	3.673	5.264	10.838
SiO <sub>2</sub>	0.030	0.648	0.897	67.402
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	-	-	-	0.197
S	0.002	-	-	0.001
K <sub>2</sub> O	-	-	0.131	4.102
CaO	-	0.003	0.083	2.114
TiO <sub>2</sub>	0.475	0.010	0.382	0.302
Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	-	0.054	0.020	0.031
MnO	-	0.280	0.282	-
FeO	78.825	81.406	78.590	5.951
ZrO <sub>2</sub>	0.015	0.056	0.021	0.010
F	0.073	-	-	-
SrO	0.040	-	-	0.564
V <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.033	0.015	0.007	0.054
Total	82.574	86.999	87.579	93.427

炉壁 (KOK-2) ガラス質滓部分の反射電子像 (COMP) および特性 X 線像



定量分析値				
Element	1	Element	10	12
Mg	0.003	Na <sub>2</sub> O	-	1.481
Si	0.009	MgO	1.725	-
Fe	99.537	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.052	16.163
Sr	0.048	SiO <sub>2</sub>	30.540	39.233
Zr	0.090	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.021	0.873
O	0.360	S	0.002	0.084
As	0.126	K <sub>2</sub> O	-	2.310
Cu	0.070	CaO	0.660	12.746
Sn	0.101	TiO <sub>2</sub>	0.021	0.920
Total	100.344	Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.039	-
		MnO	0.302	0.008
		FeO	63.074	22.207
		ZrO <sub>2</sub>	0.019	-
		F	-	-
		SrO	0.176	0.302
		V <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.025	0.028
		Total	96.656	96.355

梘形鍛冶滓 (KOK-3) の反射電子像 (COMP) および特性 X 線像

第 45 図 炉壁 (KOK-2)・梘形鍛冶滓 (KOK-3) の EPMA 調査結果

## 2 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林統一  
Zaur Lomtadize・Ineza Jorjoliani・小林克也・中村賢太郎

### (1) はじめに

山口県美祿市に位置する江の河原遺跡より検出された炭化材について、加速器質量分析法 (AMS法) による放射性炭素年代測定を行った。

### (2) 試料と方法

試料は、炭化材3点(資料2～4)である。資料2 (PLD-27040) は、Ⅲ地区のSP39から出土した炭化材(散孔材)で、最終形成年輪が確認された。資料3 (PLD-27041) は、5地区のSK1から出土した炭化材(マツ科)で、最終形成年輪が確認できなかった。資料4 (PLD-27042) は、6地区のSK1から出土した炭化材(アカガシ亜属)で、最終形成年輪が確認された。

測定試料の情報、調製データは第6表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製 15SDH)を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

第6表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-27040	資料名: 資料2 調査区: 3地区 遺構: SP39 その他: 20140417	種類: 炭化材(散孔材、半割) 試料の性状: 最終形成年輪含む5年輪分 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-27041	資料名: 資料3 調査区: 5地区 遺構: SK1 その他: 20140224	種類: 炭化材(マツ科) 試料の性状: 不明、一見最終形成年輪だが年輪界で綺麗に割れているだけ 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-27042	資料名: 資料4 調査区: 6地区 遺構: SK1 その他: 20140425	種類: 炭化材(アカガシ亜属) 試料の性状: 最終形成年輪含む4年輪分 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)

### (3) 結果

第7表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代を、第46図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代(yrBP)の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差( $\pm 1\sigma$ )は、測定の

統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、および半減期の違い(<sup>14</sup>Cの半減期5730 ± 40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

<sup>14</sup>C年代の暦年較正にはOxCal4.1(較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第7表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ 13C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1σ)	14C年代 (yrBP ± 1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-27040	- 26.71 ± 0.18	600 ± 20	600 ± 20	1310AD (26.6%)	1330AD
				1339AD (28.8%)	1360AD
				1387AD (12.8%)	1397AD
PLD-27041	- 26.53 ± 0.28	339 ± 20	340 ± 20	1495AD (22.1%)	1524AD
				1559AD (33.3%)	1602AD
				1615AD (12.8%)	1631AD
PLD-27042	- 28.46 ± 0.23	676 ± 19	675 ± 20	1282AD (50.0%)	1299AD
				1370AD (18.2%)	1380AD
				1300AD (73.5%)	1369AD
				1381AD (21.9%)	1406AD
				1476AD (32.9%)	1532AD
				1538AD (62.5%)	1636AD
				1276AD (64.1%)	1307AD
				1362AD (31.3%)	1386AD

#### (4) 考察

以下、2σ暦年代範囲(確率95.4%)に着目して、結果を整理する。

3地区のSP39から出土した資料2(PLD-27040)の炭化材(散孔材)は、1300-1369 cal AD (73.5%)および1381-1406 cal AD (21.9%)で、13世紀末～15世紀初頭の範囲を示した。これは鎌倉時代～室町時代に相当する。

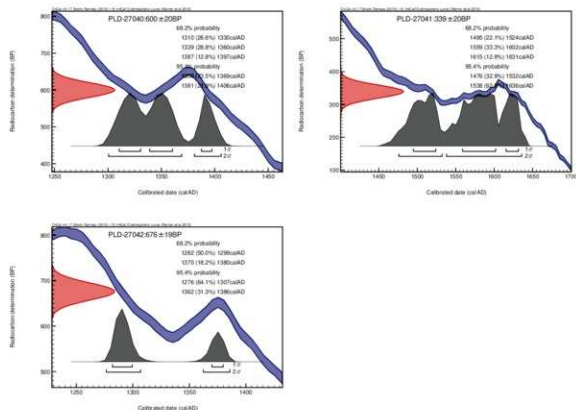
5地区のSK1から出土した資料3(PLD-27041)の炭化材(マツ科)は、1476-1532 cal AD (32.9%)および1538-1636 cal AD (62.5%)で、15世紀後半～17世紀前半の範囲を示した。ただし、測定した部位が最終形成年輪ではないため、材の伐採・枯死年より古い年代が得られていると考えられる。したがって、材の伐採・枯死年は室町時代～江戸時代、あるいはそれ以降と考えられる。

6地区のSK1から出土した資料4(PLD-27042)の炭化材(アカガシ亜属)は、1276-1307 cal AD (64.1%)および1362-1386 cal AD (31.3%)で、13世紀後半～14世紀後半の範囲を示した。これは鎌倉時代～室町時代に相当する。

#### 参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337-360.  
 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafliðason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55 (4), 1869–1887.



第46図 暦年較正結果

### 3 江の河原遺跡から出土した貝類遺体

中村賢太郎 (パレオ・ラボ)

#### (1) はじめに

山口県美祿市に位置する江の河原遺跡の発掘調査では、1地区のSD1から貝類遺体が出土した。ここでは貝類遺体の特徴記載と同定結果を報告する。

#### (2) 試料と方法

試料は、1地区のSD1ベルト①～②間の中層(灰褐色粘土)から出土した貝類遺体である。肉眼および実体顕微鏡で観察し、特徴を記載し、標本と比較して同定した。

#### (3) 結果と考察

二枚貝である。平面形は卵円形。殻皮のみ残存している。殻皮の色は黒褐色。殻頂付近あるいは腹

縁近くまで、V字状あるいは顆粒状の模様がある。これらの特徴からイシガイ科 (Unionidae) と同定される。イシガイ科の中でも、マツカサガイ (*Pronodularia japonensis*) あるいはニセマツカサガイ (*Inversunio yanagawensis*) の可能性が考えられる。

マツカサガイやニセマツカサガイなどイシガイ科は、小川や水路の砂礫～砂泥底に生息する。今回出土したイシガイ科の貝類もSD1内に自然に生息していた可能性が考えられる。なお、イシガイ科は食用も可能である。

第8表 1地区SD1の貝類遺体

資料名	地区名	遺構名	層位	その他	分類群	部位	左右		数量	計測値
							左	右		
資料1	1地区	SD1	中層 (灰褐色粘土)	ベルト ①～②間 2013.12.24	イシガイ科	殻皮	左	1	殻長: 36mm, 殻高: >27mm	
							右	1	殻長: >39mm, 殻高: >27mm	
							右	1	殻長: >45mm, 殻高: 34mm	
							右	1	殻長: 32mm, 殻高: >23mm	
							右	1	殻長: >37mm, 殻高: >24mm	
							不明	4		



第47図 1地区SD1出土のイシガイ科殻皮



## V 総括

### 1 調査の意義

江の河原遺跡は、丘陵および砂礫台地を分断するように形成された谷地形を埋める形で埋積する、狭小な扇状地上に立地している点に特徴がある。美祇市域の集落遺跡は主に砂礫台地上に立地している点で立地を異にしており、扇状地上で遺跡が確認されること自体が現時点では稀である。こうした状況下、狭小な扇状地での調査事例として希少であるとともに、その実態を把握することができるという点に、今回の調査の大きな意義が見出せる。

### 2 調査結果の概略

調査の結果を概略的に示すと、以下のようになる。

- ① 13世紀後半～末に開拓されたと推定される農村（居住域と耕作地）が確認された。
- ② 扇状地内は複数の微高地と低地に細分でき、居住域は微高地上に立地する。
- ③ 低地は耕作地として利用されており、その用水路と推定できる溝を検出した。
- ④ 15世紀後半～16世紀になると、土師器杯が非常に少ない一方で、青花碗の出土が割合的に多く出土しており、13世紀後半～14世紀前半とは様相が異なる。
- ⑤ 時期検証が不十分だが、およそ15世紀代には鉄製品の鋳造および鍛造加工を行っている。
- ⑥ 遺物量は激減するが、近世以降も存続し、現在にまで至る。
- ⑦ 現在の居住地は13世紀後半～末の居住域と概ね重複する。

江の河原遺跡周辺は現在、居住地と農地が展開しており、今回の調査契機も場整備に伴うものである。上記の所見から、今回の調査は現在の居住地と農地の原型となる中世の農村を確認したということになる。狭小な谷底平野での耕地拡大こそが、江の河原遺跡に集落が開拓された契機と考えられる。

### 3 遺物に関する所見

#### (1) 6地区SK1出土遺物について

6地区の遺物包含層からは、13世紀後半～14世紀前半の土師器がまとまって出土している。その中でも、土師器杯が一括廃棄された状況で検出された窪み（SK1）では、13世紀代の特徴をもつ器形と14世紀代の特徴を持つ器形が重なり合って分離できない状態で出土した。

法量および組成から、13世紀後半に位置づけられている本郷遺跡SK15出土資料と、14世紀前半に位置づけられている岡田・江良遺跡SK15出土資料との間に位置づけることが可能であり、13世紀末～14世紀初頭と位置づけたい。ただし、そもそもの基準資料（特に14世紀代）の時期比定が流動的な側面をもっているため、追検証は必要である。

なお、13世紀前半以前の資料は基本的にないことから、当遺跡が13世紀後半～末に開拓された集落・耕作地であると位置づけている。

#### (2) 谷状落ち込み出土遺物について

5地区で検出された谷状落ち込みの埋土からは、15世紀（特に後半）～16世紀の遺物がまとまって

出土した。ここからは、この時期の生活用具としての器種組成が基本的に揃っているが、土師器杯が非常に少なく、代わりに青花碗の出土量が高い割合で出土していた点に特徴がある。

これらの生活用具の使用者は、経済力の高い者（もしくは集団）が想定でき、13世紀後半～14世紀前半とは様相を異にする状況が想定できよう。

### (3) 鑄造・鍛冶関連遺物について

5地区SK1を中心に、スサ混じりの焼土塊および鋳滓らしきものが一定量出土した。金属学的分析を実施した結果、これらは炉壁片・鉄滓であり、鉄鑄物の鑄造と鍛造鉄器加工の双方が行われた可能性が高いことが判明した。

何を作っていたかで遺跡の評価が大きく変わるが、(2)の所見と合わせて、江の河原遺跡が単に農村と位置づけるだけでは完結しない側面を備えていることがうかがい知れる。

これらの時期については、5地区SK1出土土師器杯(56)から、15世紀末～16世紀前半を前後する時期のものと推定しているが、土器の時期比定そのものが不安定であるうえに、1点のみの出土資料からの評価である点で検証不足とならざるを得ない。今後の追検証が必要である。

## 4 遺構に関する所見

### (1) 1地区SD1について

1地区SD1は14世紀前半までに機能していた用水路で、集落が開拓された13世紀後半～末に形成されたものと推定している。この水路は地形に沿って蛇行する簡易なものであり、すでに形成されていた自然小水路に手を加えて掘削されたものであることが、土層断面から推定できる。なお、小川や水路の砂礫～砂泥底に生息するイシガイ科の貝類が出土したことも、用水路と解釈することと矛盾しない。

この用水路の延長上は、現在の水路と重複しているものと推定できる。したがって、現在の水路の一部は13世紀後半～14世紀前半頃の用水路を踏襲していることがわかる。

### (2) 遺構の立地について

今回の調査では、小規模な掘立柱建物物が3・5・6地区で検出されており、かつ、遺物も一定量出土している。一方で、1・2・4地区は掘立柱建物を構成しそうな柱穴自体の検出が皆無に近く、かつ、遺物量も極めて少ない。このため、居住域と非居住域が明瞭に区別される。

居住域は砂礫層の堆積などによって形成された微高地上に立地するが、必ずしも微高地全体を利用してはならず、微高地内でも片側に偏って分布する傾向が確認できた(3・5地区)。おそらく、洪水・氾濫の被害を受ける確率の高い箇所を避けた選地と考えられる。

時期別にみると、13世紀後半～14世紀前半の遺構・遺物は各居住域で一定量確認できており、居住域が散在的に分布する集落を想定できる。一方、15世紀～16世紀の遺構・遺物は基本的には5地区に一極集中しており、13世紀後半～14世紀前半とは様相を異にする。

13世紀後半～14世紀前半の様相を農村と仮定している以上、15世紀～16世紀の様相は農村とは異なる機能を担っていた可能性が考えられる。5地区は旧街道沿いに位置することから、陸路を重視した何らかの役割が想定できよう。しかし、現時点ではそれを具体化するのが難しい。遺物の所見で述べたように、鉄製品生産の内容によって評価は大きく変わる。

一方、現在の江の河原集落の分布はむしろ13世紀後半～14世紀前半の様相に近く、微高地内における分布の偏りすら踏襲している印象を受ける。山間部の谷筋に形成される農村の様相としてはこちらが典型的といえそうである。このため、15世紀後半～16世紀の分布のあり方は、遺物の所見とあわせて、単に農村と位置づけるのが困難な特殊な状況が浮き彫りとなろう。

## 5 まとめ

現代の江の河原の集落の原型は、13世紀後半～末に開拓された農村に求められ、居住地の立地や用水路の配置などは当時の状況を踏襲している箇所が認められた。耕作地は開拓当初は地形に合わせた不整形のものであるが、現代に至るまでに直線的で規模の大きいものに改変されている。そして、今回の場合整備によって、より直線的で大規模なものへと姿を変えることで、江の河原の集落は新たな段階を迎えることになるといえよう。

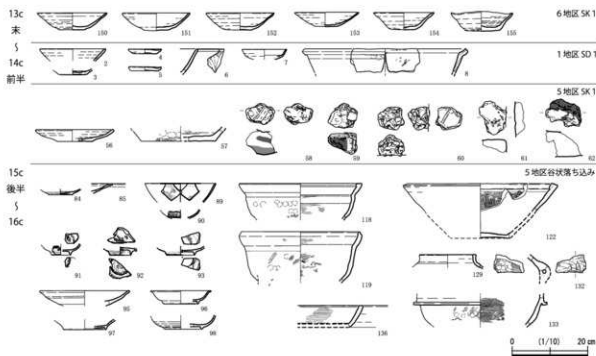
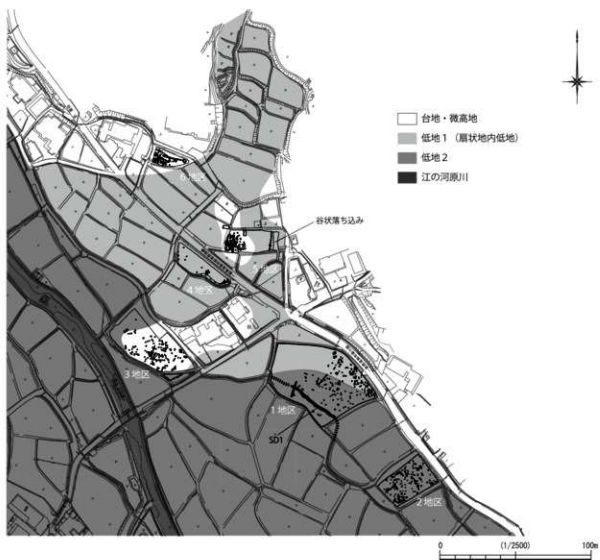
江の河原の集落が、開拓当初の基本構成を踏襲しつつも、時代に応じて徐々に姿を変えていった状況が浮かび上がったことが、今回の調査の最も大きな成果といえそうである。

また、これまでの県内における中世集落の調査事例は、比較的経済力の高い者（もしくは集団）に関する事例が多かった。これに対して江の河原遺跡は青磁・白磁も出土しているものの、基本的には一般集落の様相を示す事例として希少例と位置づけることができそうである。

一方で、時期比定にあいまいな側面が含まれる点、15世紀後半～16世紀の様相に対する解釈を提出できなかった点などの課題が未解決となった。将来的に周辺調査事例が加われば、あらためて検証および再評価していく必要があろう。

## 参考文献

- 小野正敏 1982 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会  
小南裕一 2004 「付編 長門地域の中世土師器編年試案」『上太田遺跡 市の瀬遺跡 南々畑遺跡』財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター・豊北町教育委員会  
國守進 2012 「第二編第一章第三節 耕地の拡大」『山口県史 通史編 中世』山口県  
太宰府市教育委員会 2000 「大宰府条坊後XV -陶磁器分類編-」  
田中倫子 2012 「第五編第一章 諸産業の発達と流通経済の発展」『山口県史 通史編 中世』山口県  
日本道路公団山口工事事務所・山口県教育委員会 1996 「本郷遺跡」  
山口市教育委員会 2010 「大内氏館跡X I」  
渡辺一雄 2004 「第三章 遺跡からみた防長の中世」『山口県史 通史編 中世』山口県



第 48 図 微地形復原図・主要遺物変遷図

# 圖 版



調査区 全景（南東から）



調査区 全景 (南西から)



調査区 遠景（北西から）





1地区 全景（北から）



1地区 西壁南側土層（南東から）



1地区 東壁北側土層（南西から）



1地区 北壁東側土層（南東から）



1地区 北壁中央土層（南東から）



1地区 北壁西側土層（南から）



1地区 SD1 南東壁土層（西から）



1地区 SD1 完掘状況（北西から）



1地区 SD1 礫出土状況（南東から）



1地区 SD1 土層（南東から）



1地区 SD2 土層（南西から）



1地区 SD2 完掘状況（南西から）



2地区 全景（西から）



2地区 東壁土層（南西から）



2地区 西壁土層（東から）



2地区 SK19土層（南から）



2地区 SK1土層（北から）



2地区 SK1完掘状況（北から）



2地区 SK13土層（西から）



2地区 SK13完掘状況（西から）



3地区 全景（北から）



3地区 北壁東側土層（南から）



3地区 北壁西側土層（南から）



3地区 北壁中央土層（南西から）



3地区 西壁南側土層（南東から）



3地区 西壁土層（北から）



3地区 SP1 土器出土状況（北から）



4地区 全景（北から）



4地区 西壁土層（南から）



4地区 北壁土層（南から）



4地区 SK1 土層 (南西から)



4地区 SK4 土層 (南西から)



4地区 SD1・SD2 南側土層 (北から)



4地区 SD1 中央土層 (南から)



4地区 SK3・SP4 土層 (西から)





5地区 全景（北から）



5地区北端 完掘状況（西から）



5地区 西壁土層（北東から）



5地区 掘立柱建物（SB1～SB4）（南から）



5地区 SK1 土層 (東から)



5地区 SK3 土層 (南から)



5地区 SK3 完掘状況 (北から)



5地区 SP42 土層 (北から)



5地区 SP43 出土状況 (南から)



5地区 谷状落ち込み完掘状況（北西から）



5地区 北壁（谷状落ち込み）土層（南西から）



6地区 全景（北から）



6地区 西壁土層（南東から）



6地区 北壁西側土層（南東から）



6地区 北壁中央土層（南東から）



6地区 掘立柱建物 (SB1・SB2) (北から)



6地区 SK1 出土状況 (西から)



6地区 SK5土層（東から）



6地区 SK5完掘状況（東から）



6地区 SD1完掘状況（東から）



6地区 SD2完掘状況（北から）



6地区 SD1土層（東から）



6地区 包含層遺物出土状況（西から）



1・2地区 出土遺物



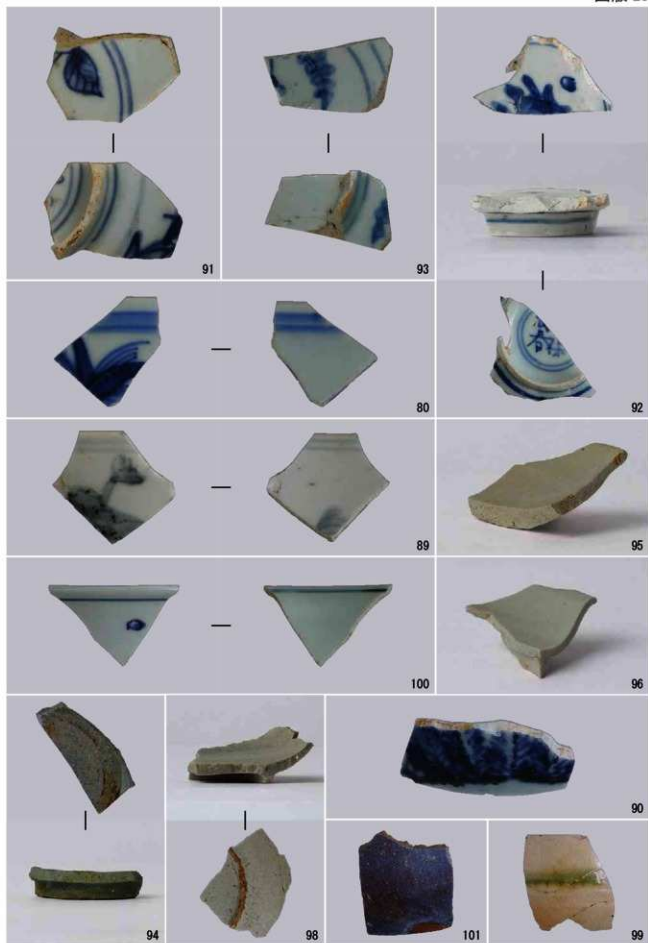




5地区 出土遺物(1)



5地区 出土遺物(2)



5地区 出土遺物(3)



5地区 出土遺物(4)



5地区 出土遺物(5)



5地区 出土遺物(6)



SK1 出土 土師器杯



150



151



152



153



154



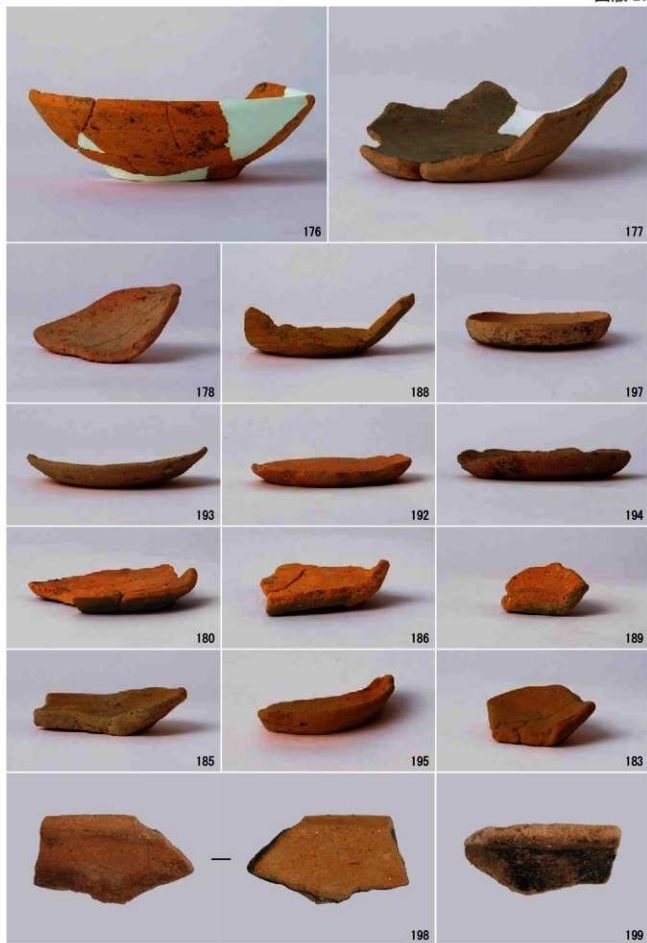
155

6 地区 出土遺物 (1)





6地区 出土遺物(2)



6地区 出土遺物(3)



6地区 出土遺物(4)

# 報告書抄録

ふりがな	えのがわらいせき
書名	江の河原遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第89集
編集著者名	上田克也(編) 中里伸明 荒蒔周平
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL083-923-1060
発行年月日	西暦2015年3月16日(平成27年3月16日)

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
江の河原遺跡	山口県美祿市東厚保町川東	352136		34° 8' 33"	131° 9' 27"	20131017 20140319 20140408 20140509	5,680	ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
江の河原遺跡	集落	中世 近世	掘立柱建物 7棟 土坑 39基 溝 12条 柱穴 836個 谷状落ち込み 1ヶ所	土師器 土師質土器 瓦質土器 輸入陶磁器 近世陶磁器 硯 鉄製品 炉壁・鍛冶滓	13世紀末～14世紀初頭の土師器一括資料 谷状落ち込みより15世紀～16世紀の遺物多数 鑄造および鍛冶関連遺物

要約	<p>江の河原遺跡は、美祿市南西部に位置し、厚狭川の支流である平原川(江の河原川)流域に散在する扇状地上に立地する集落遺跡である。</p> <p>調査の結果、13世紀後半～末頃に開拓された農村であり、微高地上で居住域を、低地にて耕作に伴う水路を検出した。居住域で出土した土師器杯は13世紀末～14世紀初頭のものであり、当地域の基準資料になりうる。</p> <p>15世紀～16世紀では、谷状落ち込みより青花や瓦質土器などの生活用具が多く出土しており、農村とは異なる様相を示すようになる。また、鑄造および鍛冶を遺跡内で行っている状況も確認できた。</p> <p>江の河原遺跡周辺は現在、居住地と耕作地が展開しているが、今回の調査は現在の居住地・農地の原型を確認できたことに大きな意義を見出せる。</p>
----	--

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第89集

## 江の河原遺跡

2015年3月16日

編集・発行 公益財団法人山口県ひとつくり財団  
山口県埋蔵文化財センター  
〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号

印刷 児玉印刷株式会社  
〒755-0008 山口県宇部市明神町3丁目4番3号